

国道49号横雲バイパス関係発掘調査報告書 IV

川根谷内墓所遺跡

2001

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

国道49号横雲バイパス関係発掘調査報告書 N

川根谷内墓所遺跡

2001

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

国道49号は福島県いわき市を起点とし、郡山市、会津若松市を経由して、津川町、水原町、亀田町を経て新潟市に至る主要幹線道路です。平成9年にはこの国道と並行し、磐越自動車道が開通し、現在では太平洋側との結びつきが更に強くなってきました。交通手段が発達した現在、国道49号沿いの水原町・安田町が新潟市への通勤圏内となり、阿賀野川を横断する京ヶ瀬村～亀田町に至る区間での渋滞が問題となっていました。建設省はこの区間の混雑を解消し、現道を生活道路として機能を回復させ、亀田バイパスと一体となって、新潟都市圏の拡大と発展に寄与することを目的に横雲バイパスの建設を計画しました。

新潟県教育委員会でも、道路建設に係る三遺跡の発掘調査を平成6年から行ってまいりました。既に上郷遺跡、牛道遺跡は報告書が刊行され、本書の川根谷内墓所遺跡が横雲バイパス関係の最後の報告書となります。

川根谷内墓所遺跡は横越町の沖積地に所在する平安時代・近世の遺跡です。平安時代の遺構は、井戸や畠跡と見られる規則的に掘られた溝状遺構が多數検出され、遺物は須恵器や土師器などが出土しています。近世の遺構は水田跡と用水路と見られる溝が検出され、遺物は陶磁器が出土しています。

この調査成果が地域の歴史を明らかにする資料となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の計画段階から実施に至るまで、格別の御配慮を賜りました建設省北陸建設局新潟国道事務所、本調査に多大なご協力とご支援を賜った横越町教育委員会に対し、厚く御礼を申し上げます。

平成13年3月

新潟県教育委員会

教育長 野 本 憲 雄

例　　言

1. 本報告書は、新潟県中蒲原郡横越町大字横越字上郷2379-1番地ほかに所在する川根谷内墓所（かわねやちばしょ）遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は国道49号横雲バイパスの建設に伴い、新潟県教育委員会（以下「県教委」と略す）が建設省から受託して実施したものである。
2. 発掘調査は調査主体である県教委が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」と略す）に発掘調査を委託し、平成6年と7年に実施した。
3. グリッド杭の打設および航空写真的撮影は株式会社オリスに委託した。
4. 本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏7度である。既存の地図を用いた場合は、その出典を記した。
5. 整理作業及び報告書作成に係る作業は、平成6・7年度の冬期間と平成12年度に実施し、埋文事業団調査課がこれに当たった。
6. 出土遺物と調査にかかる資料は、すべて県教委が県埋蔵文化財センターで保管している。遺物の註記記号は「川ネ」「川ネヤチ」「川根谷内」とし、出土地点・層位を併記した。
7. 本書における遺物番号はすべて通し番号とした。図面図版・写真図版と觀察表の番号は一致している。
8. 本文中の註はすべて脚注とした。また、引用参考文献は著者および発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
9. 本書の作成作業は北村亮（埋文事業団調査課整理担当課長代理）の指導の下に江口友子が執筆・編集を行った。遺物実測・トレース・図版作成等は整理作業員が行った。
10. 遺物図版に使用したスクリーントーンの凡例は下記のようである。



11. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多くのご指導・ご助言を賜った。厚く御礼申し上げる。（敬称略、五十音順）

亀田郷土地改良区　　福田　仁史

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査・整理の体制	1
A. 調査体制 B. 整理体制と経過	
第Ⅱ章 周辺の環境	3
1. 遺跡の位置	3
2. 周辺の遺跡	3
第Ⅲ章 調査の概要	5
1. 一次調査	5
2. 二次調査	5
A. グリッドの設定 B. 調査方法 C. 調査の経過	
第Ⅳ章 遺 跡	7
1. 基本層序	7
2. 遺構	7
A. 概要 B. 遺構各説	
第Ⅴ章 遺 物	11
1. 概要	11
2. 平安時代の土器分類	11
3. 平安時代の土器各説	13
A. 遺構出土土器 B. 包含層出土土器	
4. 土製品	14
5. 石製品	14
6. 金属製品	15
7. 近世陶磁器	15
A. 遺構出土陶磁器 B. 包含層出土陶磁器	
第VI章 まとめ	17
1. 遺跡の性格	17
2. 平安時代の土器	17
要約、引用・参考文献	18
遺物觀察表	19

插図目次

第1図 蒲原平野の地形と主要遺跡	3
第2図 周辺の遺跡	4
第3図 一次調査トレンチ位置図	5
第4図 グリッド設定図	6
第5図 基本層序	7
第6図 周辺の地形分類	8
第7図 周辺の旧地形	8
第8図 平安時代の土器分類	12
第9図 当て具痕・タキ具痕の細分類	12

表 目 次

第1表 土器の器種構成比率	17
---------------	----

図版目次

図版1 遺構全体図1	
図版2 遺構全体図2 (1)	
図版3 遺構全体図2 (2)	
図版4 遺構全体図2 (3)	
図版5 遺構全体図2 (4)	
図版6 遺構全体図2 (5)	
図版7 遺構全体図2 (6)	
図版8 遺構個別図1 SE119、SE122、SK121、SK222、P229	
図版9 遺構個別図2 SD3・SD4・SD10・11、SD34・35A・35B・36・37、SD94・95・96、SD219・220・221・255・256・257、SD233・234・235・236・237・238、SD141・142、SD169	
図版10 遺構個別図3 SD260	
図版11 遺物実測図1 1~14	
図版12 遺物実測図2 15~29	
図版13 遺物実測図3 30~40	
図版14 遺物実測図4 41~58	
図版15 遺物実測図5 59~66	
図版16 遺跡周辺の旧地形	
図版17 遠景	
図版18 全景	
図版19 SE119断面・完掘、SE122断面・完掘、SK121断掘、SK26長臺出土状況、SK222断面・遺物出土状況	
図版20 P229断面・完掘、SD3断面、SD4断面、SD10・11断面、SD34断面、SD35断面、SD36断面	
図版21 SD37断面、SD94断面、SD95断面、SD96断面、11・12Lグリッド完掘	
図版22 8~10L~Oグリッド完掘、6~9LNグリッド完掘	
図版23 SD220断面、SD218~221・224完掘、SD221断面、SD256断面、SD234断面、SD235断面、SD236断面、SD237断面	
図版24 SD238断面、SD141断面、SD120・141断面、SD141遺物出土状況・完掘、SD141・142断面、SD142・143断面	
図版25 5・6DEグリッド完掘、4EFグリッド完掘	
図版26 SD260断面・完掘、6~8C~Eグリッド完掘	
図版27 SD169断面・完掘、9・10OPグリッド近世ハサ木、10Nグリッド北壁セクション、作業風景	
図版28 遺物写真1 1~15	
図版29 遺物写真2 16~35、37~39	
図版30 遺物写真3 36、40~58	
図版31 遺物写真4 59~71	
図版32 近世陶磁器実測図・写真1 72~83	
図版33 近世陶磁器実測図・写真2 84~91	

第Ⅰ章 序 説

1. 調査に至る経緯

国道49号横雲バイパス建設に伴う発掘調査は、上郷遺跡〔赤羽ほか1994〕〔春日ほか1997〕・牛道遺跡〔立木1999〕、本書の川根谷内墓所遺跡の3遺跡である。調査に至る経緯の詳細は前書に譲り、本遺跡に関係する事項のみ述べる。

川根谷内墓所遺跡は周知の遺跡で、昭和63年に行ったバイパス法線内の分布調査の結果、遺跡の範囲が拡大し、一次調査を平成5年4月22日～23日に実施した。この結果、遺物包含層が良好に残っていることが確認され、10,000m²について二次調査が必要であると建設省北陸地方建設局に報告した。

2. 調査・整理の体制

A. 調査体制

発掘調査は、新潟県教育委員会（以下、「県教委」と略す）が主体となり、（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」と略す）が委託を受け、下記の体制で行った。

〔一次調査〕

調査期間 平成5年4月22日～23日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調 査 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 藍原 直木（専務理事・事務局長）

渡辺 耕吉（総務課長）

茂田井信彦（調査課長）

庶 務 藤田 守彦（総務課主事）

調査指導 寺崎 裕助（調査課調査第二係長）

調査担当 赤羽 正春（調査課主任）

調査職員 高橋 知之（調査課専門員）

〔二次調査〕

平成6年度

調査期間 平成6年7月11日～12月9日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調 査 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 藍原 直木（専務理事・事務局長）

渡辺 耕吉（総務課長）

茂田井信彦（調査課長）

庶 務 泉田 誠（総務課主事）

調査指導 寺崎 裕助（調査課調査第二係長）

調査担当 春日 真実（調査課文化財調査員）

調査職員 上野 一久（調査課主任調査員）

中沢 賢（調査課主任調査員）

大杉 真実（調査課嘱託員）

平成7年度

調査期間 平成7年4月10日～6月30日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 平野 清明）

調査 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

管理 藍原 直木（専務理事・事務局長）

山上 利雄（総務課長）

亀井 功（調査課長）

庶務 泉田 誠（総務課主事）

調査指導 寺崎 裕助（調査課調査第二係長）

調査担当 土橋由理子（調査課文化財調査員）

調査職員 上野 一久（調査課主任調査員）

山下 健（調査課嘱託員）

B. 整理体制と経過

出土遺物の洗浄・註記作業は発掘調査現場で発掘調査と並行して行った。平成6・7年度の冬期間に基盤的な整理作業を行い、本格的な整理作業は、埋文事業団にて平成12年4月～13年3月に行った。

〔整理体制〕

平成6年度 二次調査の体制と同一である。

平成7年度 二次調査の体制と同一である。

平成12年度

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 野本 憲雄）

整理 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

管理 須田 益輝（専務理事・事務局長）

長谷川司郎（総務課長）

戸根与八郎（調査課長）

庶務 椎谷 久雄（総務課班長）

整理指導 北村 亮（調査課整理担当課長代理）

整理担当 江口 友子（調査課整理担当第三班班長）

整理職員 間 栄子（調査課整理担当第三班嘱託員）

和泉 裕子（調査課整理担当第三班嘱託員）

小山たか子（調査課整理担当第三班嘱託員）

広野 澄（調査課整理担当第三班嘱託員）

吉原 智子（調査課整理担当第三班嘱託員）

第Ⅱ章 周辺の環境

1. 遺跡の位置

川根谷内墓所遺跡の所在する横越町（平成8年町制施行）は、新潟県の中央からやや北東より、中蒲原郡の西部に位置し、北は豊栄市、西は新潟市と亀田町、東は水原町、南は新津市に接している。

横越町は新潟平野のはば中央に位置し西を信濃川、東を阿賀野川、南を小阿賀野川、北を新潟砂丘に囲まれた、かつて横越島と呼ばれていた場所である。本遺跡は横越町のはば中央の自然堤防上に位置する。地理的環境については、牛道遺跡で既に詳細に記載されているので、本報告書では割愛した。

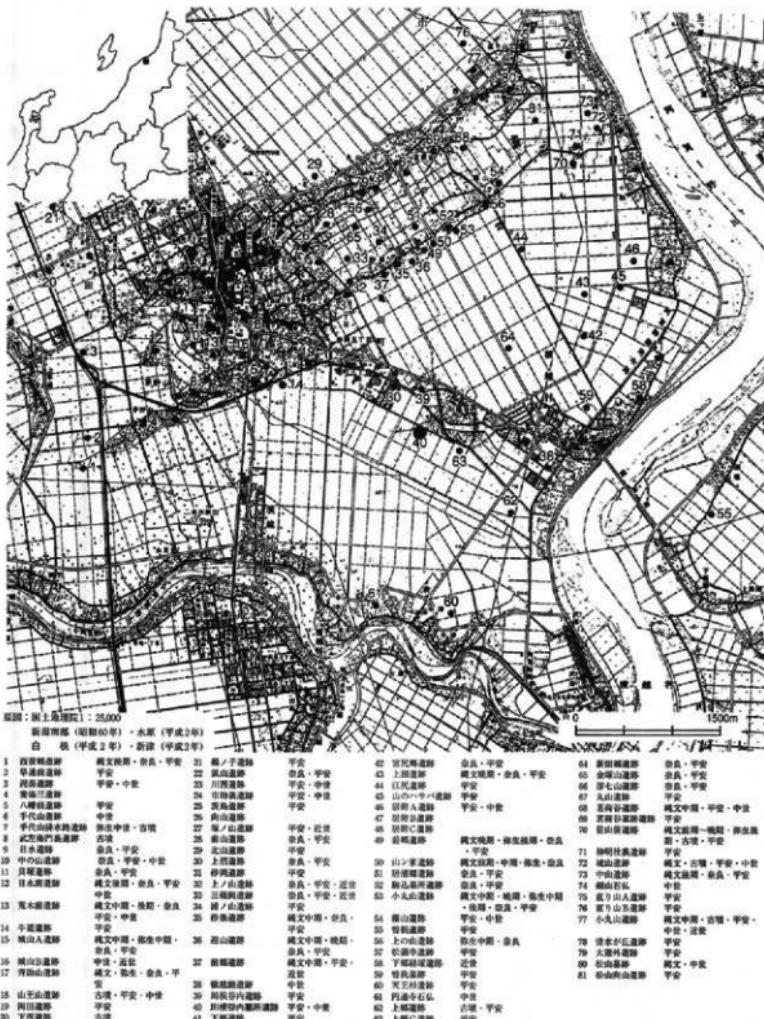


第1図 蒲原平野の地形と主要遺跡 (田中ほか1996を一部改変)

2. 周辺の遺跡

川根谷内墓所遺跡の所在する新潟平野は、新潟砂丘と信濃川や阿賀野川などが作り出した沖積低地・自然堤防・大小の潟湖から成る。横雲バイパス関係で発掘調査を行った2遺跡の概略を述べるが、その他の周辺の遺跡については、牛道遺跡で既に詳細に記載しており、本報告書では割愛した。特徴として当地域周辺では、9世紀前葉から10世紀初頭の遺跡が多く所在し、当期が開発の活気の一つであったことが推測される[春日ほか1997]。上郷遺跡は阿賀野川左岸の自然堤防上に立地し、古墳時代前期の遺物と平安時代の掘立柱建物2棟、竪穴建物1棟、井戸2基、水田跡・畝状造構・土坑・溝等のほか、自然流路が検出された。水田跡は畦畔が方形にめぐるものも存在するが、地形の制約のため多くは略台形もしくは涙滴形を呈している。平安時代の遺物は9世紀末から10世紀初頭を中心とする。本遺跡との距離は約1.0kmである。

牛道遺跡は阿賀野川左岸の氾濫原に立地し、北側がもっとも内陸側の新砂丘列ににかかる。畝状遺構・井戸・土坑などが検出され、9世紀第3四半期から10世紀初頭にかけての須恵器・土師器が多数出土している。綠釉陶器・灰釉陶器のほか檜扇等の木製品も出土している。墨書き土器が33点出土しているが、「市」「万」など県内で出土例の少ない則天文字が書かれたものがある。本遺跡との距離は約1.5kmである。

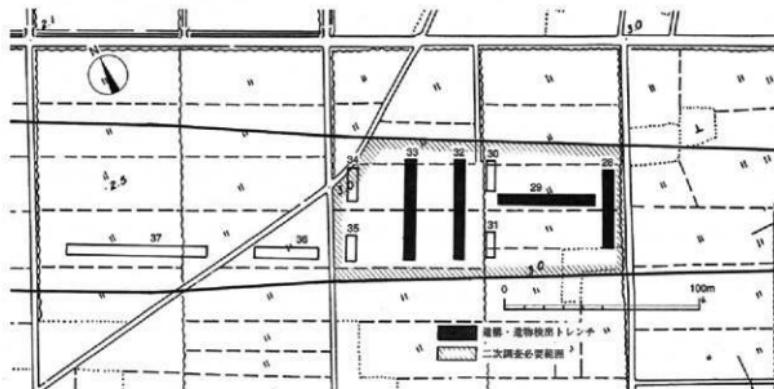


第2図 周辺の遺跡 (立木1999を一部改変)

第三章 調査の概要

1. 一次調査

一次調査は平成5年4月22日～23日に県教委が主体となり、埋文事業団が行った。調査対象地16,000m²に1.8m幅のトレンチを10本任意に設定し、バックホーで徐々に掘り下げ、人力によって遺構・遺物の有無を確認し記録した。28・29・32・33Tr(トレンチ)で遺構を検出し、遺物は須恵器・土師器・砥石等が出土した。28～35Trの範囲は周囲の水田より50cmほど高くなっている、遺物包含層も良好な状態で保存されていることが確認された。二次調査対象範囲は28～35Trの範囲10,000m²となり、その旨建設省に報告した。

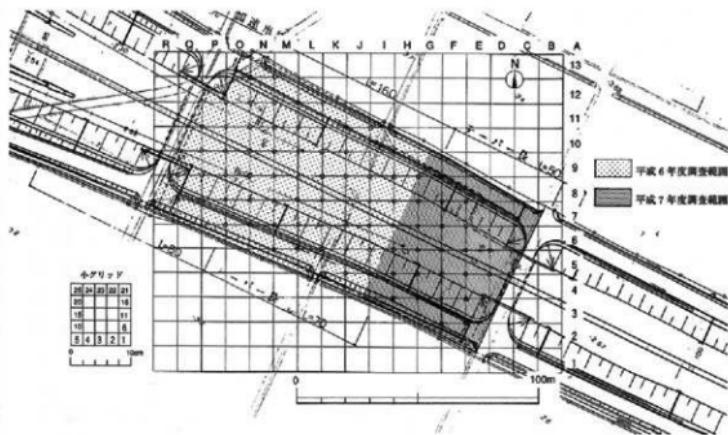


第3図 一次調査トレンチ位置図

2. 二次調査

A. グリッドの設定

グリッドは国家座標に沿って大グリッドを10×10m単位に分割し、その中を更に2×2mに25等分して小グリッドとした。大グリッドの呼称は東西軸をアルファベットの大文字(東→西)、南北軸を算用数字(南→北)とし、両者の組み合わせで「1A」などと表わした。小グリッドは各大グリッドの東南隅を基点に1～25までの番号を付し、大グリッドとともに「1A10」などと表わした。調査区中央の8J杭の座標値はX:205580、Y:55910である。



第4図 グリッド設定図

B. 調査方法

表土はバックフォーを用い遺物包含層直上まで除去した。遺物包含層は基本的に人力によって掘削し、排水はベルトコンベアを用い、所定の場所へ搬出した。遺構検出は主にN層で行った。

遺構番号は種別で分けずにすべて通し番号を付した。整理の段階で種別・番号を変更したものもあるが、基本的に発掘現場で付したものを使用している。遺構平面図は平板を用い1/40、断面図は1/20で実測することを基本とした。遺構写真は平成6年度は35mmモノクロネガ・カラーネガで撮影し、平成7年度は35mmモノクロネガ・カラーポジで撮影した。また、平安時代の遺構全体の完掘写真は、航空写真撮影で対応した。

C. 調査の経過

発掘調査は県教委が主体となり埋文事業団が委託を受けて行った。調査期間は冬期の現場休止期間を含めて平成6・7年度の2か年である。調査区の西側から東側に向かって調査を進めていった。平成6年度は7月11日～12月9日までに6,400m²の調査を行い、遺物は浅箱(34×55×9cm)8箱が出土した。遺構は井戸や土坑、多数の溝状遺構が検出され、平安時代の自然流路と見られるSD141から主に遺物が出土した。11月24日に航空写真撮影を行った。

平成7年度の当初は調査区を二分していた農道下の調査を行い、SD141の続きを発掘した。前年度調査部分の平面図が終了していない遺構の平面図を作成した。西側から東側に向かって調査を進め、土坑や多数の溝状遺構を検出した。5月30日に航空写真撮影を行った。4月10日～6月30日までに3,600m²の調査を行い、遺物は20箱出土した。

第N章 遺跡

1. 基本層序

本遺跡は調査前の現況は水田であったが、明治時代の土地更生図などによると、かつては桑畠・果樹園として利用されており、周辺の水田よりも標高が高かったと推定される。標高は3.1~3.2mと平坦である。基本層序は以下のようである。I~III層から各時代の遺物が混在して出土しているが、おおむねII層が近世遺物包含層、III層が平安時代遺物包含層と大別できる。遺構検出は主にIV層で行った。

I層：黒褐色～にぶい黄褐色粘土質シルト
水田耕作土である。

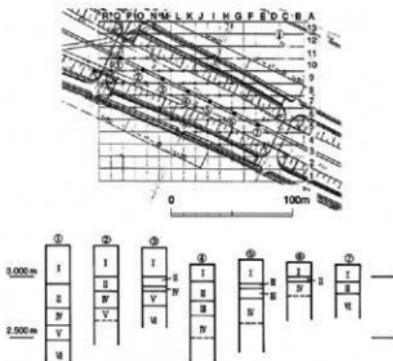
II層：黒褐色～灰褐色シルト。近世遺物包含層。

III層：黒褐色シルト。平安時代遺物包含層。

IV層：褐色砂質シルト。漸移層。

V層：褐色～にぶい黄褐色砂質シルト。
漸移層。

VI層：明黄褐色粘土。地山。



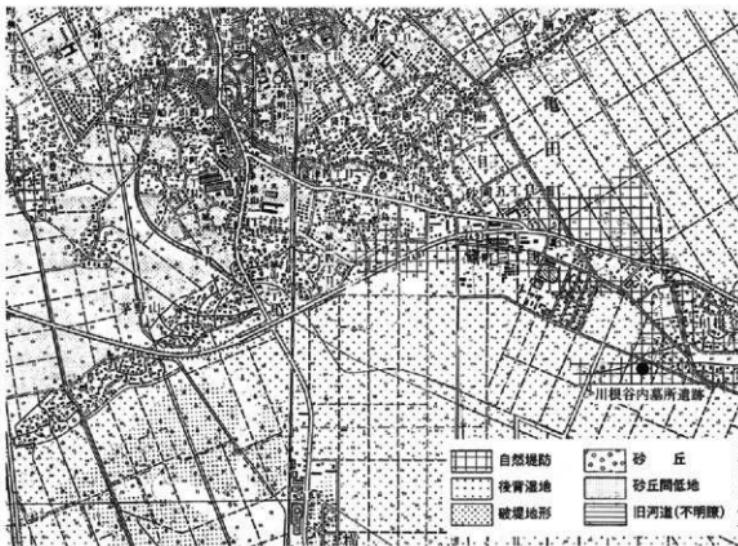
第5図 基本層序

2. 遺構 (図版1~10・18~27)

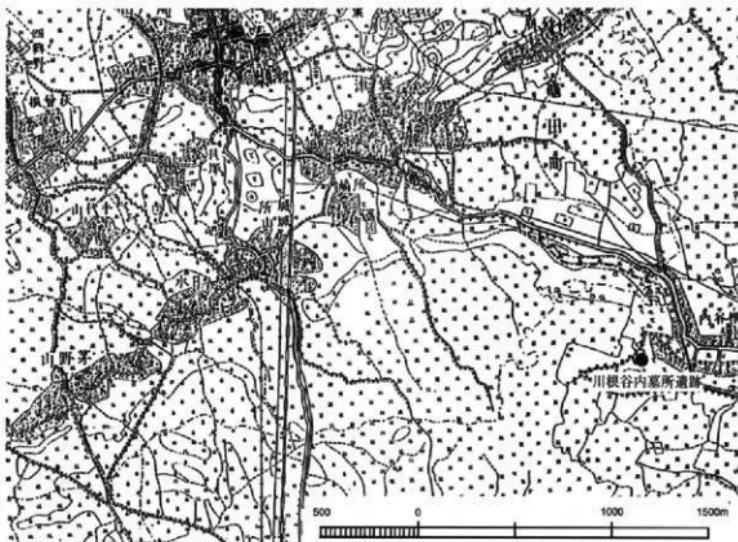
A. 概要 (図版1~7・18)

川根谷内墓所遺跡は平安時代、近世、近現代の3つの時代の遺構が検出されている。各時代の遺構は方向軸の違いによっておおむね区別が可能である。平安時代の遺構は調査区中央の農道から北西側の調査区で長軸N-15°-Wとそれに直交する遺構、東南側の調査区の遺構はN-40°-50°-Wとそれに直交するものである。近世の遺構はN-35°-40°-Wとそれに直交する遺構。また、N-75°-Eの方向軸の遺構もある。近現代の遺構は、ほぼ現在の土地区画と同一でN-65°-Wとそれに直交するものである。

各時代別の遺構数は、平安時代の井戸3基、土坑9基、ピット1基、溝状遺構約70条、自然流路2条である。近世の遺構は土坑4基、溝状遺構約50条で他にハサ木と見られるピット列がある。近現代の遺構は、水田時のハサ木のピット列、水田に改変される前の桑畠・果樹園の樹木跡などである。ほかに時代の特定できない溝状遺構、不明遺構などが多数ある。ここでは、平安時代の遺構を中心に記述し、近世の遺構は特徴的なものだけに限定し、近現代の遺構は取りあげない。



第6図 周辺の地形分類 河賀野川水害地形分類図
(滋賀県北陸地方建設局河賀野川工事事務所 1964) を一部改変



第7図 周辺の旧地形
大日本帝國測量部 明治44(1911)年測図
'木原'「新潟南郷」に加筆

B 遺構各説（図版 8～10・19～27）

S E 119（古代）

平安時代の井戸は3基検出されているが、その内最も規模の大きいものである。9Kグリッドに位置し素掘りである。全体は検出できていないが直径2m前後で深さは0.98mを測る。東側に2段のステップがある。土器器無台碗が出土しているが隣接するSD141出土の遺物と接合するものが多い。

S E 122（古代）

8Kグリッドに位置する素掘りの井戸である。現代の溝に切られ全体を検出できていないが、直径1.9m前後で深さは0.7mを測る。

他に平安時代の自然流路SD141の中の10Kグリッドに小型の井戸が検出されている。

S K 121（古代）

11K Jグリッドに位置する長椭円形の土坑である。長軸の方向軸はほぼ南北である。長軸5.0m以上、短軸1.64m、深さ0.28mである。覆土はレンズ状堆積である。土器器無台碗、杯蓋、瓶類などが出土している。

S K 222（古代）

7Cグリッドに位置する長椭円形の土坑で、一部がSK242に切られている。長さ5.56m、幅1.3m、深さ0.34m、長軸の方向軸はN-30°-Wである。覆土の5～11層は後に掘り込まれた穴のようである。無台杯、有台杯、長頸瓶、鍋などが出土している。

P 229（古代）

6Eグリッドに位置するピットである。長軸0.54m、短軸0.46m、深さ0.52mである。覆土はレンズ状堆積である。

S D 3（古代）

12Lグリッドに位置する溝状遺構である。長さ16.6m、幅0.3m、深さ0.14mを測り、方向軸はN-15°-Wである。

S D 4（古代）

12Lグリッドに位置する溝状遺構である。長さ8.6m、幅0.5m、深さ0.1mを測り、方向軸はN-16°-Wである。北側は二又に分かれる。SD3と方向を同じくするが距離は1.5m離れている。

S D 10・11（古代）

SD10は10L～P、9PQグリッドに位置する。SD11は10LMグリッドに位置する。SD10は自然流路SD141から引いた古代の水路と考えられる。方向軸はほぼ東西を示し、計画的に掘削されたものと考えられる。SD10の長さ59.5m以上、幅1.5～2.0m、深さ0.18mを測り、SD11は後から掘られ深さ0.12mと浅い。西側に存在した可能性のある水田に引いたものか。

S D 34～37（古代）

SD34～37は10L～Nグリッドに位置する。ほぼ東西軸に沿い、溝どうしの間隔は0.7mの狭い間隔で掘削される一群である。深さは0.1m前後である。SD35は西側で二又に分かれる。

S D 94～96（古代）

6～9L～Nグリッドに位置する。方向軸はN-20°-Wで、やや幅の広い1.5m間隔で掘削されている溝状遺構群である。深さは0.2m前後で間隔の狭い溝状遺構群と比較すると2倍の深さである。

S D219～221・255～257 (古代)

5・6 DE グリッドに位置し、N-30°-W の方向軸である。溝と溝の間隔が0.7～0.8m の狭い間隔の溝状遺構群である。幅0.3m、深さ0.1～0.15m 程度である。

S D233～238 (古代)

5～7 FG グリッドに位置し、N-50°-W の方向軸である。溝と溝の間隔が1.4～1.7m の広い間隔の溝状遺構群である。深さは0.1～0.2m 前後である。

S D141 (古代)・S D142 (近世)

SD141は5～9 K、6～11 J、10・11 I、10H グリッドを蛇行する自然流路である。幅は4.0～7.0m で深さは0.26m と浅い。SD141の中に古代の小型の素掘りの井戸が1基掘られている。古代の遺物は主にこの自然流路から出土している。SD142は近世の遺構であるが、SD141を切っているため、古代の遺物の出土が多い。

S D260 (古代)

6 CD に位置する古代の自然流路である。N-70°-E の方向軸で幅4.4m、深さ1.12m である。覆土に多量の砂鉄を含む。須恵器・土師器がそれぞれ2点出土している。

S D169 (近世)

SD169は4・5 H～J、4 K に位置する大型の遺構である。N-70°-E の方向軸である。全体は検出できていないが長さ27.0m 以上、幅13.0m の長方形になると推定され、深さは0.52m である。近世の水田跡と考えられ、周囲を巡る多数の溝状遺構は用水の可能性がある。これらの溝状遺構はおおむね方形の区画がなされ計画的に掘削されたものと考えられる。

第V章 遺物

1. 概要

本遺跡出土の遺物は平安時代9世紀後半～10世紀前半の土師器・須恵器が主体で浅箱で20箱、他に近世陶磁器7箱、石製品0.5箱、近世以降のものと見られる鉄鍋、磁器製のサイコロなどが出土している。

2. 平安時代の土器分類（第8・9図）

平安時代の土器には土師器・須恵器がある。用途別に器種分類を行ったが、器形、法量などでの細分は行っていない。須恵器はほとんどが佐渡小泊窯跡群産と見られる。煮沸具及び貯蔵具の当て具痕・タタキ具痕の細分類は第9図のようにした。

食器（1～5）

無台杯（1） 杯のうち高台を持たないもの。口径は12.0～13.0cm前後である。ロクロナデにより成形され、底部は基本的にヘラ切り無調整である。

有台杯（2） 杯のうち高台を持つものの。口径は10.0～15.0cm前後で、数は少ない。ロクロナデにより成形され、底部は基本的にヘラ切り後、調整を行っている。

杯蓋（3） 有台杯につく蓋である。口径15.0cm前後である。

無台碗（4） 碗のうち高台を持たないものの。口径は12.0～18.0cm前後と幅がある。ロクロナデにより成形され、底部は基本的に回転糸切りである。

黒色土器無台碗（5） 碗のうち高台を持たず、内面をみがいて黒色処理をしているもの。口径は12.0cmからあり、法量の大小があるが細分は行っていない。ロクロナデにより成形される。底部は基本的に回転糸切りである。

煮沸具（6～8）

小甕（6） 器高13.0cm前後の小型の甕である。ロクロナデによって成形されている。

長甕（7） 器高35.0cm前後の長胴の甕である。ロクロナデによって成形され、体部上半はカキメで調整され、下半は叩かれて丸底のものもあるが、平底もある。内面の当て具は平行線文が主体である。

鍋（8） 口径は40.0cm前後で体部上半はカキメで調整される。底部の調整は不明である。

貯蔵具（9～11）

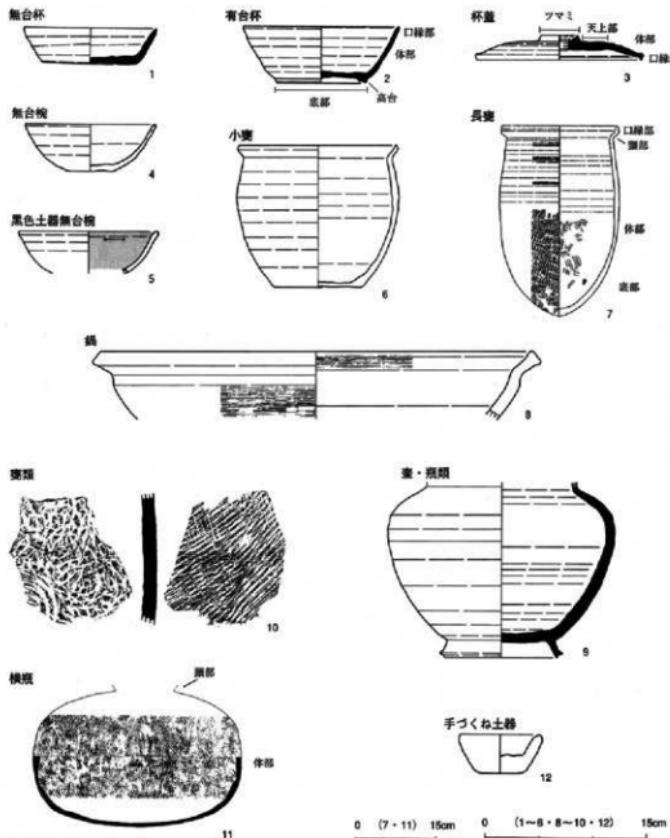
壺・瓶類（9） 長頸で頸が細いものを瓶類、短頸で頸が広いものを壺類とする分類が可能だが、全体の器形がわかるものが少なく、法量に大小もあるが、ここでは細分は行わず、壺・瓶類とする。

甕（10） 破片のみで全体の器形がわかるものはない。

横瓶（11） 僗型の体部に短い口縁がつくもの。1個体のみである。

土製品（12）

手づくね土器（12） 1点のみの出土である。

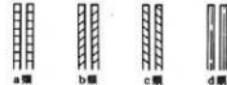


第8図 平安時代の土器分類

同心円文当て具痕



平行縞文タタキ具痕



名 称	分類基準
同心円文a痕	木目の見られないもの
同心円文b痕	年輪状の木目の見られるもの
同心円文c痕	板目状の木目の見られるもの
平行縞文a痕	木目が順り込みに対し直行するもの
平行縞文b痕	木目が右上がりに斜行するもの
平行縞文c痕	木目が左上がりに斜行するもの
平行縞文d痕	木目が平行するものもの

第9図 当て具痕・タタキ具痕の細分類（[内堀1988]）を原図として再トレース

3. 平安時代の土器各説（図版11～14・28～30）

A. 遺構出土土器

S E119 (1・2) 1・2は土師器無台碗で1は器壁が薄く、口縁部はわずかに外反する。2は全体に肉厚で丸みを帯びる。

S K12 (3) 3は土師器無台碗で口縁部は外反する。底部にわずかに墨痕がある。

S K26 (4) 4の長甕は全体の1/2が残り、内面を上に向けて出土した。口縁端部は上につまれていて。平行線文a類、同心円文の当て具で叩き出されている。

S K103 (5) 5は大甕の体部破片である。外面はカキメの後、平行線文タタキ、内面は同心円文c類の当て具痕が残る。

S K121 (6～8) 6は無台碗である。焼成は不良で軟質である。7は杯蓋でツマミは欠損し、天井部はケズられている。内面の中央部に摩耗痕が見られる。8は小型の瓶頸としたが、平瓶の可能性もある。口径は7.0cm程度である。

S K222 (9～14) 9は無台杯、10は小型の有台杯で口径は10.2cmで高台は外端接合である。いずれも佐渡小泊窯跡群産である。11は小甕の底部である。底径は6.4cmである。12は瓶頸の頸部から体部である。部分的にロクロケズりが見られる。胎土に海面骨針が含まれる。13は小型の甕頸の体部か。外面に平行線文タタキ、内面に同心円文当て具痕が見られる。14は鍋で内外面ともカキメで調整されている。口縁端部は平らである。

S K151 (15) 15は小甕で風化が著しい。口縁は短く外反する。

S D 4 (16) 16は無台碗である。口径は12.2cmで口縁端部は外反する。

S D216 (17・18) 17は無台碗である。小さな底部から体部は開き気味に立ち上がる。18は長甕である。口縁端部がわずかに上につまれていて。外面にカキメがわずかに残る。

S D217 (19) 19は長甕の底部である。底径は8.9cmでSD220出土の破片と接合している。

S D219 (20) 20は黒色土器無台碗である。胎土は精良で長石をわずかに含む。推定口径は20.5cmと大型である。

S D251 (21) 21は長甕の体部である。外面はカキメと平行線文a類、内面はカキメ、ハケメと平行線文当て具で調整されている。

S D256 (22) 22も長甕の体部である。外面はカキメと平行線文a類、平行線文当て具で調整されている。

S D141 (23～36) 23～28は無台杯である。25・26・28はSE119出土の破片と接合している。29は杯蓋である。ツマミは直径3.4cmと大きく偏平である。胎土に海面骨針を含む。30～33は無台碗である。口径は11.4cm～17.4cmと幅がある。33の口縁端部は丁寧にナデられている。34は黒色土器無台碗である。胎土は精良で黄母を含む。35は甕の体部破片である。外面は格子目文タタキ、内面は平行線文当て具で調整されている。36は横瓶で、口縁部は欠損している。外面は格子目タタキ、内面は同心円文当て具である。両面閉塞で円盤には布目の痕が残る。SD 2、SE119出土の破片と接合している。

S D120 (37) 37は須恵器の短頸が付く壺頸である。高台は内端接合で不安定である。体部外面に漫苔痕跡が残る。SD120は近世の溝であるが、SD141の上に掘削したため古代の遺物が入り込んだものと考え

られる。

S D 6 (38) 38は無台杯である。SD 6は近世の溝であることから、掘削時に混入したものと考えられる。

S D 201 (39) 39は有台杯である。体部は直線的に立ち上がり、高台は短く外端接地である。

S D 263 (40) 40は壺類の頸部から体部にかけての破片である。外面に平行線文タタキ痕がわずかに残る。

B. 包含層出土土器

遺物包含層出土土器は器種ごとに報告する。

無台杯 (41~43) 41は口縁端部が外反する。42は体部が直線的に立ち上がる。43は体部が内湾気味に立ち上がる。

無台碗 (44~47) 44は器高が5.5cmと高い。45は口縁から体部の内外面にスス・タールが付着していることから、灯明皿に転用されたものと考えられる。

黒色土器無台碗 (48・49) 48の胎土は精良で長石を含む。底部はハラ切り後ナデている。49の胎土は精良で雲母を含み、体部の底部近くをケズっている。

長甕 (50~54) 50・51は口縁端部を厚く上につまみあげている。53の口縁端部は薄くつまみあげられ、体部外面はカキメと平行線文、内面は平行線文のような痕跡がわずかに残る。54は内外カキメで調整される。

壺・瓶類 (55・56) 56は長頸瓶になると見られ、3分割で成形されている。頸部に2条の沈線が巡る。56も瓶類の体部である。部分的にケズっている。

甕 (57) 口径10.8cmになる小型の甕の口縁部である。口縁は開かず直立し、端部のみわずかに外反する。焼成不良で浅黄橙色を呈す。

4. 土製品（図版14・30）

手づくね土器 (58) 土師質の手づくね土器である。成形は丁寧で、底部外面は使用によるものか滑らかである。二次被熱を受け全体に赤変している。底部内面にはススが付着している。形態的にはとりべ状かわらけに類似する。

5. 石製品（図版15・31）

石製品には砥石とバステル形石製品がある。砥石は平安時代ないしは近世のものと考えられるが、出土状況や形態から区別はできなかったので、一括して報告する。

砥石 (59~64) 59~61・64は凝灰岩製の砥石である。59はSD 2、60はSD 8の近世遺構から出土していることから近世の砥石の可能性がある。また、59・64は被熱して部分的に赤変している。62は頁岩製の砥石である。63は砂岩製の砥石である。被熱によって赤変し、タールがわずかに付着している。

バステル形石製品 (65) 滑石製のバステル形石製品である。この器種名とすると縄文時代のバステル形石製品となるが、縄文時代の遺構・遺物が全く検出されていないことから、縄文時代の遺物とすることはできない。石板用の石墨の可能性もある。

6. 金属製品（図版15・31）

鉄鍋 (66) 鋳造の鉄鍋で腐食が著しい。底部に3本の足がある。口縁部には弦を付ける耳がついていたと思われるが残存していない。また、内面の口縁部付近にわずかに灰白色のホーロー状のものが付着している。鉄鍋は鋳造のものが一般的で鍛造の鉄鍋は少ない。また、一般にホーローは不透明釉を施したもので、18・19世紀ころの製鉄業の隆盛に伴い鉄素地のものが行われ、現在も使用されている。ホーローの技術が日本にいつ入ってきたのかは不明だが、この鉄鍋は近世以降の所産と考えたい。

7. 近世陶磁器（図版31～33）

近世陶磁器は16世紀末から19世紀末までのものが少量づつ出土している。肥前系陶磁器が主体で、在地産のものもわずかに含む。

A. 遺構出土陶磁器

- S D 2 (67) 67は染付けの皿である。内面は桜花等の色絵（赤、青、黄）、外面は染付で高台は蛇ノ目釉ハギである。
- S D 6 (68) 68は片口付きの擂鉢である。推定口径は26.3cm程度である。胎土は精良である。
- S D 43 (69) 69も擂鉢で胎土は粗雑で長石、石英、砂粒を含む。
- S D 164 (70) 70は擂鉢である。底径は13.8cmである。
- S D 113 (71) 71擂鉢である。口径は36.2cmである。釉薬はかけられてなく、在地産と見られる。
- S D 141 (72) 72の擂鉢は古代の自然流路SD141からの出土である。混入したものと考えられる。釉薬はかけられてなく、在地産と見られる。
- S D 120・142 (73～80) 73は染付の椀である。外面は蓮子窓に格子目文、見込みに五弁花文のコンニャク印判が押されている。年代は1700～1750年代頃か。74も染付の椀で矢羽文が描かれている。75も椀で外面に梅花文、見込みに「寿」の文字を変形させたような銘がある。外面は部分的に二次被焼している。76も染付椀で外面は七宝繁ぎに十字、内面は二重圓線六曜杉文と見込みに花文。77は染付の皿で内面は二重交叉線文、見込みは蛇ノ目釉ハギである。78は染付皿で、見込みは草花文と蛇ノ目釉ハギ、高台の内側に砂目が見られる。79は染付の八角鉢で、内側は格子目文、高台内は蛇ノ目釉ハギである。焼難が行われている。80は唯一の唐津鉄絵皿で1580～1600年代頃のものと見られる。
- S D 171 (81) 伊万里白磁の皿で口縁端部に口鏽あり。1630～1640年代頃のものか。
- S D 177 (82・83) 82は徳利の上部である。口径は5.0cmである。83は擂鉢で高台が欠損している。高台接合部に5条の櫛齒状の工具でつけた溝が付けられているが、これは古代から現代に続く技法である。底部内外面に砂目が付着する。
- S D 202 (84) 染付の皿である。裏銘は二重方形枠内に変形字が描かれ、18世紀後半～幕末頃のものと見られる。

B. 包含層出土陶磁器

杯 (85・86) 85は杯で底径は2.6cmで外面に草花文が描かれる。86は口縁端部に茶粂が巡る。

碗 (87) 87は碗で見込みに五弁花文、裏銘は方形枠に「福」の字の草書体を崩した変形字が染め付けられている。18世紀後半頃のものと見られる。

皿 (88・89) 88は伊万里青磁の皿で内面に砂目が多量に付着している。底径は4.6cmである。89は伊万里青磁の八角皿である。底径は8.3cmである。

擂鉢 (90) 90は擂鉢で推定底径16.0cmである。高台の一部を切り取っている。

サイコロ (91) 磁器製のサイコロである。明治時代に伊万里では磁器製のサイコロが作られたようである。目の配置は現在のものと同一である。1.6~1.7cmの立方体である。1・2・6・5の目は緑、3・4の目は赤の釉薬が4~5mmの窪みにつけられている。同様のサイコロが糸魚川市中原遺跡〔高橋ほか1986〕でも出土している。

第V章 まとめ

1. 遺跡の性格

今回の調査範囲では、平安時代、近世、近現代の遺構・遺物が検出されたが、中世の遺構・遺物は検出されていない。遺跡は東西240m、南北200mの広い範囲で、平安時代の遺物のほか、室町時代（珠洲系陶器、瀬戸系陶器）の遺物も採取されている。このことから、今回の調査範囲外に中世の遺構・遺物が存在する可能性が考えられる。

本遺跡は平安時代を中心とする生産跡である。当該期の遺構の中で最も多く検出された畑跡と考えられる多数の溝状遺構は、間隔が4.7mで掘削される一群と1.4~1.7m間隔で掘削される一群がある。この間隔の相違は掘削時期の相違か、栽培植物の相違によるものか興味深いが、花粉分析を行っていないので明らかにできない。間隔が広い溝状遺構群の方が深く掘削されている。また、自然流路SD141からSD10などの溝を掘り、用水路として利用していたようである。この地は、調査前も周囲の水田より0.5mほど標高が高く微高地を呈していた。平安時代には畑、近世には一部水田、近代には畑、現代は水田と時代によって土地活用の変遷が見られる。

2. 平安時代の土器

本遺跡の平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）の土器の器種構成比率、食膳具構成比率を第1表に示した。また、ほぼ同時期（9世紀末～10世紀初頭）の上郷遺跡の構成比率も同時に示した。食膳具が占める比率は65.2%、貯蔵具は0.7%、煮沸具は34.1%である。上郷遺跡は食膳具が71.7%、貯蔵具が1.0%、煮沸具が27.3%とはほぼ同様な数値である。

第1表 土器の器形構成比率

七、如何在多個機器上建立與各子系統的連接

上經卷第十一

刈田区内高粱品种纯度之率				单产	品种	单产
品 种	刈田区内高粱品种	穗数%	粒数%	单产	品种	单产
高粱 稗 合计	2570 1348	578	567		二 台 板	3553 (334)
白 叶	368	79	28	18	青 台 板	*
红 粟	343	153	93	45	白 台 板	36 0.041
黑 高粱	351	1299	761	642	土 壤 耐 酸	2653 (265)
红 台 板 合计	1526	796	388	348	黑 台 板	52 0.052
黑 台 板	49	29	11	10	黑 台 板	2653 (453)
小 麦 粟	1576	1299	299	356	黑 台 板	45 0.057
黑 台 板 合计	3504	3510	1561		黑 台 板	45 0.057

要 約

1. 川根谷内墓所遺跡は新潟県中蒲原郡横越町大字横越字上郷2379-1番地ほかに所在する。
2. 遺跡は阿賀野川左岸の氾濫原の自然堤防上に立地する。標高は約3mである。
3. 発掘調査は国道49号横雲バイパスの建設に伴う緊急発掘調査である。調査期間は平成6年7月11日～12月9日、平成7年4月10日～6月30日の2か年である。
4. 遺跡は平安時代、近世、近現代の3つの時代の遺構が検出されているが、おおむね時代毎に遺構の方向軸が異なり判別が可能である。
5. 平安時代の遺構は井戸、土坑と畠と見られる多数の溝状遺構が検出されたが、建物跡は検出されていない。調査区を東西に二分する自然流路から主な遺物が出土した。
6. 平安時代の土器は9世紀後半～10世紀前半の時期のものである。須恵器は佐渡小泊産が主体である。
7. 近世の遺構は用水路と見られる溝と水田跡が検出されている。ハサ木跡と見られるビット列や土坑も検出されている。
8. 近世の遺物は肥前陶磁器を中心に、16世紀末から19世紀末まで断続的に少量づつ出土している。一部在地産と見られるものも含む。

引用・参考文献

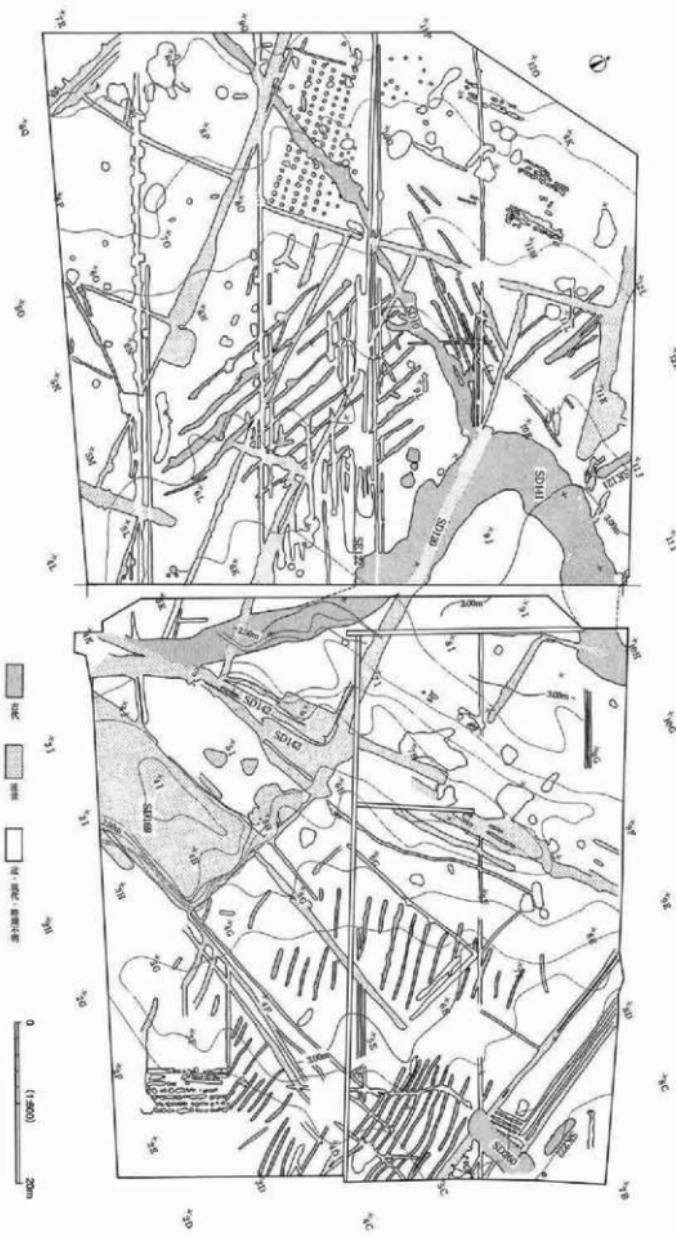
- 内閣信雄 1988 「須恵器壺に見られる叩き目文について」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 大橋康二 1989 「肥前陶磁」考古学ライブラリー-55 ニュー・サイエンス社
- 大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布—発掘資料を中心として—」『北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁 古唐津・伊万里の流通をさぐる』佐賀県立九州陶磁文化館編
- 春日真実ほか 1997 『上郷遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第87集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤唐九郎編 1972 『原色陶器大辞典』浜交社
- 斎木秀雄 1989 「煮る、切る、おろす—さまざまな調理具—」「よみがえる中世3武士の都 錦倉」平凡社
- 高橋 保ほか 1986 「中原遺跡」「中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集 新潟県教育委員会
- 田中久夫ほか 1996 「新潟砂丘の形成史」「第四紀研究」35-3 第四紀研究会
- 立木由理子1999 「牛道遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書 第91集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 宮崎 博ほか 1996 「畜池遺跡—総理大臣官邸整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」都内遺跡調査会

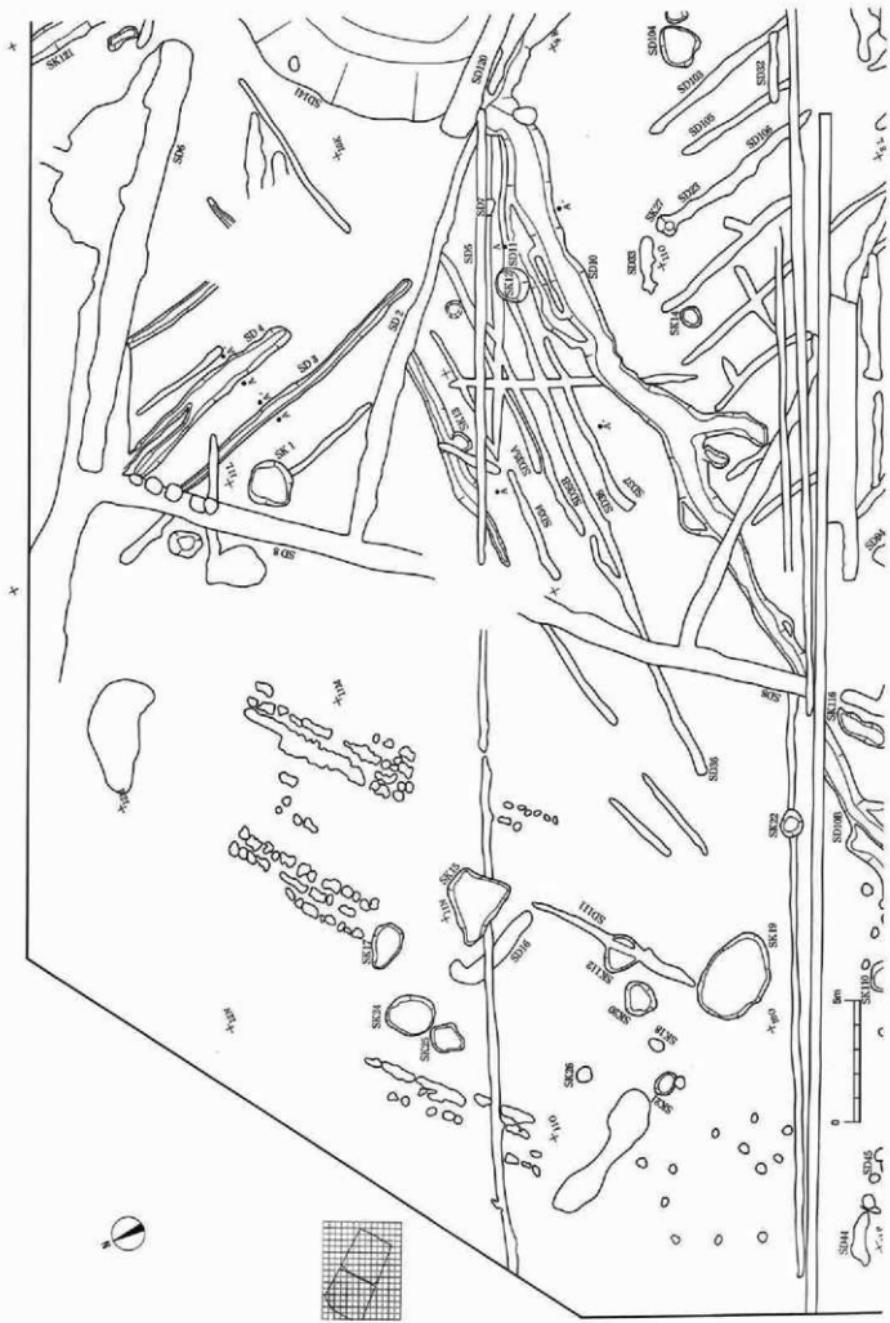
遺物観察表

法量の単位はcm、重さの単位はgである。

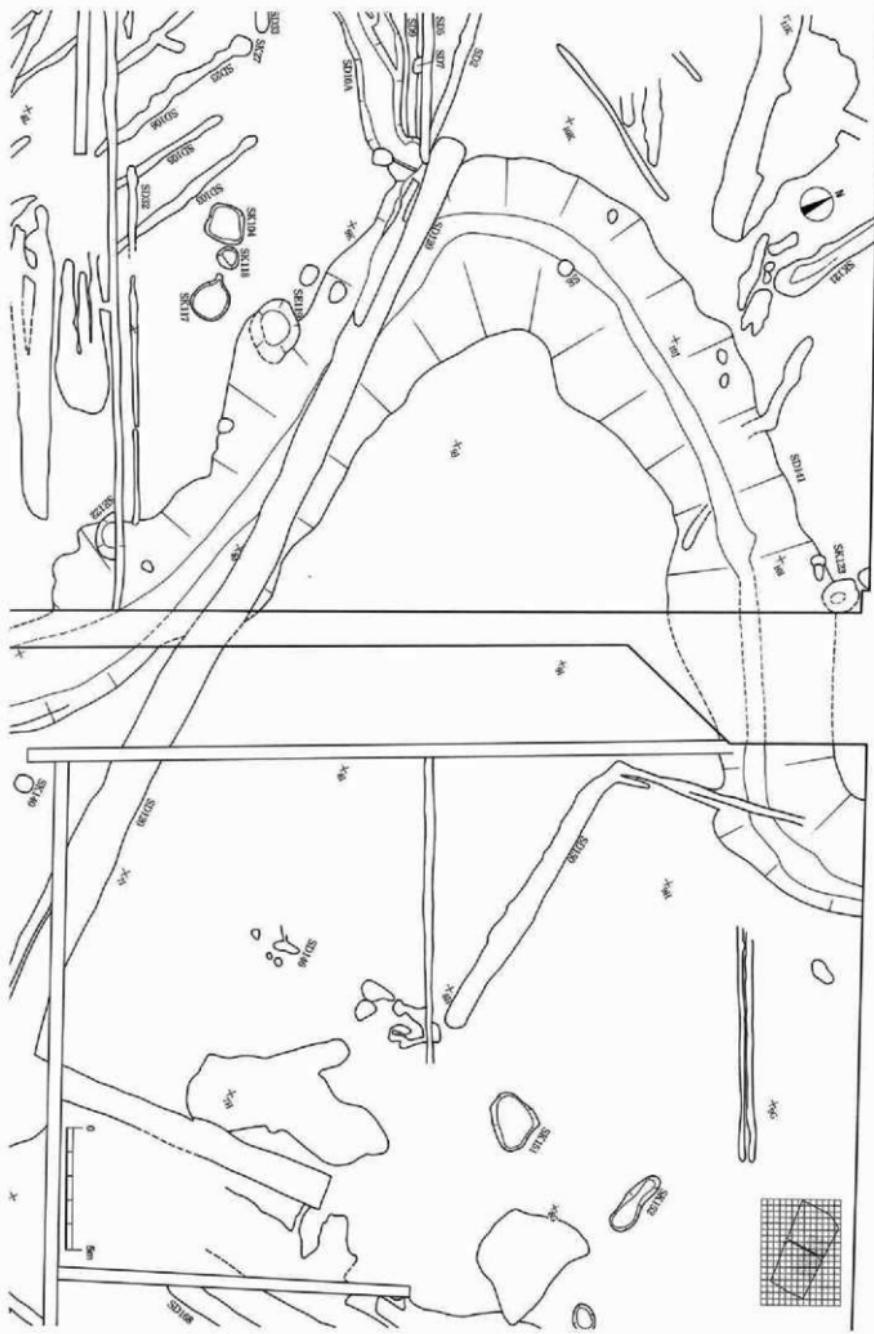
番号	出土グリッド	遺物名	部位	種別	断面	断土	含着物	口径	底径	壁高	口径部	色調	内・外	地城	手	法	備考
1	3.1	Y	上・中・下	磨打石	圓	圓	圓	17.0	15.5	1.0	17.0	灰	灰	高砂	圓	圓	無
2	3.2	N	上・中	磨打石	圓	圓	圓	13.0	12.5	1.0	13.0	灰	灰	高砂	圓	圓	無
3	3.2	N	上	磨打石	圓	圓	圓	12.4	12.4	4.0	3.16	灰	灰	高砂	圓	圓	無
4	4	黄土	上	磨打石	圓	圓	圓	21.0	21.0	5.16	21.0	灰	灰	高砂	圓	圓	無
5	5.1	N	上	磨打石	圓	圓	圓	12.2	12.2	4.3	6.16	灰	灰	高砂	圓	圓	無
6	5.1	N	上	磨打石	圓	圓	圓	15.0	15.0	3.16	15.0	灰	灰	高砂	圓	圓	無
7	10.1	Y	上	磨打石	圓	圓	圓	7.0	7.0	1.16	7.0	灰	灰	高砂	圓	圓	無
8	5.12	上	磨打石	圓	圓	圓	圓	12.8	8.4	3.15	12.8	灰	灰	高砂	圓	圓	無
9	5.12	3	上	磨打石	圓	圓	圓	10.2	5.7	5.1	10.2	灰	灰	高砂	圓	圓	無
10	6.10	Y	中	磨打石	圓	圓	圓	8.6	5.4	2.16	8.6	灰	灰	高砂	圓	圓	無
11	6.10	Y	中	磨打石	圓	圓	圓	8.6	5.4	2.16	8.6	灰	灰	高砂	圓	圓	無
12	6.10	Y	中	磨打石	圓	圓	圓	8.6	5.4	2.16	8.6	灰	灰	高砂	圓	圓	無
13	6.B-C	5	中	磨打石	圓	圓	圓	7.0	7.0	1.16	7.0	灰	灰	高砂	圓	圓	無
14	7.5	Y	中	磨打石	圓	圓	圓	7.0	7.0	3.16	7.0	灰	灰	高砂	圓	圓	無
15	8.5	5	中	磨打石	圓	圓	圓	14.6	8.0	3.16	14.6	灰	灰	高砂	圓	圓	無
16	11.4	5	中	磨打石	圓	圓	圓	12.2	5.8	4.16	12.2	灰	灰	高砂	圓	圓	無
17	4.22	S.026	上	磨打石	圓	圓	圓	21.0	12.5	4.16	21.0	灰	灰	高砂	圓	圓	無
18	4.22	S.026	上	磨打石	圓	圓	圓	21.0	12.5	4.16	21.0	灰	灰	高砂	圓	圓	無
19	4.C-B-17.22	S.D27	上	磨打石	圓	圓	圓	8.9	8.9	2.16	8.9	灰	灰	高砂	圓	圓	無
20	5.C	S.D29	上	磨打石	圓	圓	圓	(30.5)	(30.5)	2.16	灰	灰	高砂	圓	圓	無	
21	4.C	S.D29	上	磨打石	圓	圓	圓	11.6	7.5	3.16	11.6	灰	灰	高砂	圓	圓	無
22	4.C	S.D29	上	磨打石	圓	圓	圓	11.7	6.0	2.9	11.7	灰	灰	高砂	圓	圓	無
23	10.1	9.J	中	磨打石	圓	圓	圓	12.4	8.9	3.16	12.4	灰	灰	高砂	圓	圓	無
24	19	J	中	磨打石	圓	圓	圓	12.4	8.9	3.16	12.4	灰	灰	高砂	圓	圓	無
25	7.8	J	中	磨打石	圓	圓	圓	12.4	8.9	3.16	12.4	灰	灰	高砂	圓	圓	無
26	7.8	J	中	磨打石	圓	圓	圓	12.6	8.4	3.4	10.16	灰	灰	高砂	圓	圓	無
27	S.DH	中	磨打石	圓	圓	圓	小	12.8	8.0	3.0	12.8	灰	灰	高砂	圓	圓	無
28	S.DH	中	磨打石	圓	圓	圓	小	13.3	9.2	3.5	10.16	灰	灰	高砂	圓	圓	無
29	9.18	S.DH	中	磨打石	圓	圓	圓	15.4	3.4	2.3	15.4	灰	灰	高砂	圓	圓	無
30	9.18	S.DH	中	磨打石	圓	圓	圓	(11.4)	3.4	2.3	(11.4)	灰	灰	高砂	圓	圓	無
31	8.12	S.DH	中	磨打石	圓	圓	圓	12.8	5.5	3.6	12.8	灰	灰	高砂	圓	圓	無
32	10.2	S.DH	中	磨打石	圓	圓	圓	17.4	6.2	4.16	17.4	灰	灰	高砂	圓	圓	無
33	9.21	S.DH	中	磨打石	圓	圓	圓	(13.0)	(13.0)	2.16	灰	灰	高砂	圓	圓	無	
34	9.17	S.DH	中	磨打石	圓	圓	圓	11.7	7.0	2.16	11.7	灰	灰	高砂	圓	圓	無
35	3.25	S.DH	中	磨打石	圓	圓	圓	15.1	4.8	3.5	15.1	灰	灰	高砂	圓	圓	無
36	9.K	S.DH	中	磨打石	圓	圓	圓	28.5	28.5	25.0	28.5	灰	灰	高砂	圓	圓	無
37	S.DH	中	磨打石	圓	圓	圓	小	20.9	17.5	3.1	4.16	灰	灰	高砂	圓	圓	無
38	11.K.B	S.DH	上	磨打石	圓	圓	圓	11.7	11.7	5.2	5.2	灰	灰	高砂	圓	圓	無
39	6.23	S.DH	上	磨打石	圓	圓	圓	14.6	4.3	4.16	14.6	灰	灰	高砂	圓	圓	無
40	5.25	S.DH	上	磨打石	圓	圓	圓	12.6	7.8	3.16	12.6	灰	灰	高砂	圓	圓	無
41	4.C.5	I	中	磨打石	圓	圓	圓	12.0	6.6	3.1	11.16	灰	灰	高砂	圓	圓	無
42	7.C.5	I	中	磨打石	圓	圓	圓	11.7	7.0	2.16	11.7	灰	灰	高砂	圓	圓	無
43	6.C.2	I	中	磨打石	圓	圓	圓	15.1	4.8	3.5	15.1	灰	灰	高砂	圓	圓	無

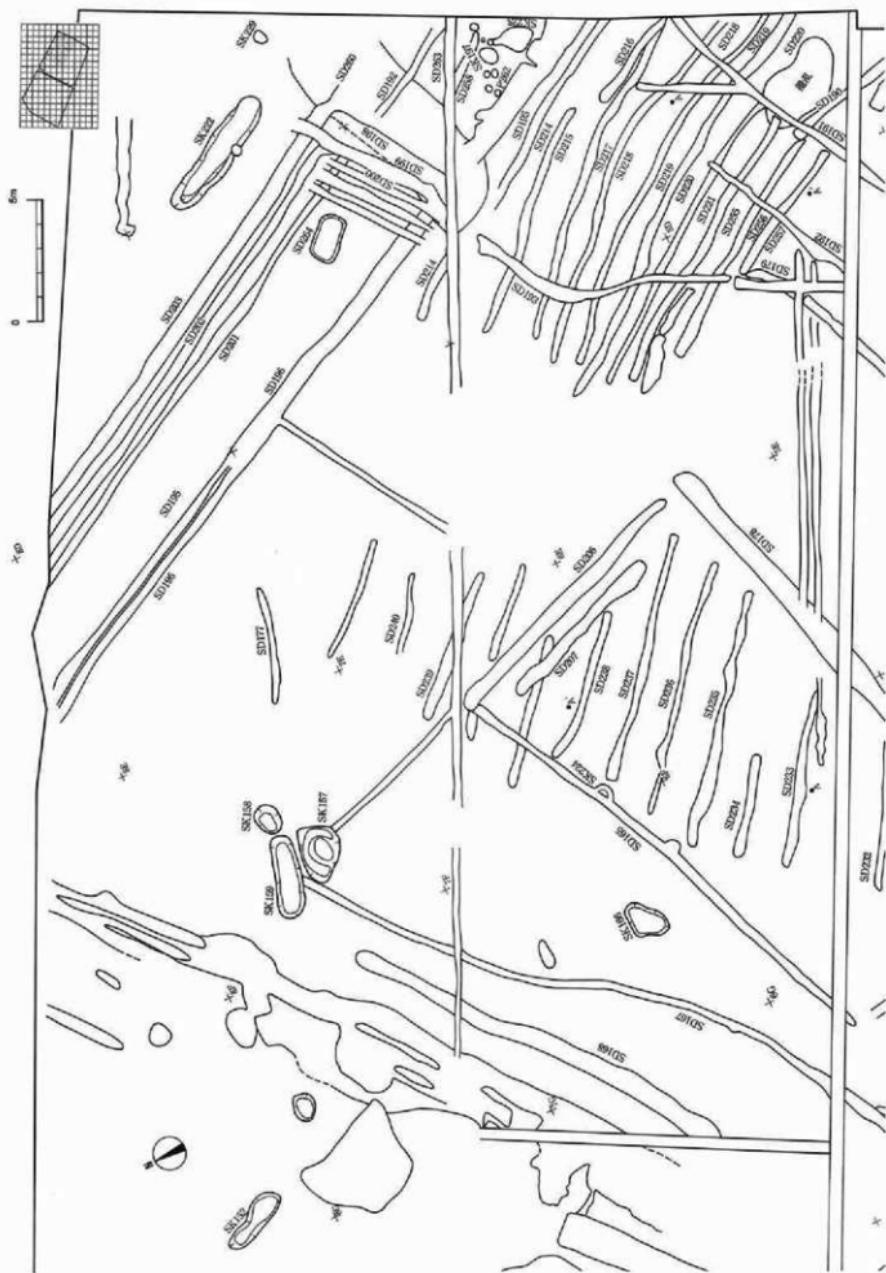
番号	No	地名	高さm	厚さm	組成	岩相	土	含有物	口付	断面	断面	断面内/外	被膜	手	法	備考	
45	10 J 2	土	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	125	5.6	3.2	1/16	無	無	無	無	
46	9 K 3	土	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	129	4.5	3.1	3/16	淡黄色	無	無	無	
47	10 K 20	土	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	122	5.2	3.8	3/16	米白色	無	無	無	
48	6 B 10	土	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	122	5.8	3.8	3/16	米白色	無	無	無	
49	C 6	V	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	210	8.4	3.4	3/16	青灰色	無	無	無	
50	6 C 15	22	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	213	8.6	3.4	3/16	青灰色	無	無	無	
51	6 C 22	1	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	213	8.6	3.4	3/16	青灰色	無	無	無	
52	6 C 22	1	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	213	8.6	3.4	3/16	青灰色	無	無	無	
53	9 L 21	土	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	250	2.6	2.6	2/16	青灰色	無	無	無	
54	1	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	250	2.6	2.6	2/16	青灰色	無	無	無		
55	2 F 7	3-3層	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	230	2.4	2.4	2/16	青灰色	無	無	無	
56	5 B 22	W	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	230	2.4	2.4	2/16	青灰色	無	無	無	
57	10 D 20	W	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	108	7.6	3.6	4/16	青灰色	無	無	無	
58	6 D 19	W	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	106	7.2	3.8	3/16	青灰色	無	無	無	
59	10 L 12	S D 5	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	105	4.8	2.0	3/16	青灰色	無	無	無	
60	10 L 5	S D 8	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	105	3.3	1.9	3/16	青灰色	無	無	無	
61	6 C 25	1	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	105	7.7	4.5	3/16	青灰色	無	無	無	
62	6 C 25	1	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	105	7.7	4.5	3/16	青灰色	無	無	無	
63	7 T 1	1	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	105	7.7	4.5	3/16	青灰色	無	無	無	
64	7 T 1	1	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	105	7.7	4.5	3/16	青灰色	無	無	無	
65	7 T 6	5 X 172	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	105	7.7	4.5	3/16	青灰色	無	無	無	
66	7 T 6	5 X 172	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	105	7.7	4.5	3/16	青灰色	無	無	無	
67	10 X 4	S D 2	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	105	7.7	4.5	3/16	青灰色	無	無	無	
68	10 J 6	S D 6	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	105	7.7	4.5	3/16	青灰色	無	無	無	
69	6 Q 16	S D 4	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	263	1.8	1.8	1/16	青灰色	無	無	無	
70	6 Q 16	S D 6	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	263	1.8	1.8	1/16	青灰色	無	無	無	
71	7 H 13	S D 13	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	262	1.8	1.8	1/16	青灰色	無	無	無	
72	5 H 10	S D 10	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	262	1.8	1.8	1/16	青灰色	無	無	無	
73	5 H 10	S D 10	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	262	1.8	1.8	1/16	青灰色	無	無	無	
74	5 X 14	S D 12	1-3層	0.5	岩条帶	無	無	無	76	3.4	5.4	4/16	白色	無	無	外：矢羽田 内：見人山ノ寒マサニヨウ	
75	5 D 10	下	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	90	3.4	5.6	2/16	白色	外：海光山 内：見人山ノ寒マサニヨウ	二本被岩	-	
76	6 J	5 D 10	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	107	4.3	6.2	3/16	米白色	無	無	七本被岩 内：五本被岩 外：見人山ノ寒マサニヨウ	
77	5 D 20	上	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	120	4.2	3.4	3/16	明ホリゾーナ	内：二本被岩 外：三本被岩 内：五本被岩 外：見人山ノ寒マサニヨウ	-	-	
78	5 D 20	中	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	135	6.8	3.1	7/16	明ホリゾーナ	内：二本被岩 外：三本被岩 内：五本被岩 外：見人山ノ寒マサニヨウ	-	-	
79	5 D 20	上	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	176	7.6	3.4	7/16	白色	外：海行地ノ寒ハナ、内：橘子山文	地被有	-	
80	8 J	5 D 10	同	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	5.1	5.1	5.1	5/16	白色	外：海行地ノ寒ハナ、内：橘子山文	地被有	-
81	7 T 9	5 D 10	同	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	50	5.6	5.6	5/16	白色	外：海行地ノ寒ハナ、内：橘子山文	地被有	-
82	7 T 9	5 D 10	同	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	50	5.6	5.6	5/16	白色	外：海行地ノ寒ハナ、内：橘子山文	地被有	-
83	7 T 9	5 D 10	同	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	50	5.6	5.6	5/16	白色	外：海行地ノ寒ハナ、内：橘子山文	地被有	-
84	7 T 15	5 D 20	同	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	5.1	5.6	5.6	5/16	白色	外：海行地ノ寒ハナ、内：橘子山文	地被有	-
85	7 T 15	5 D 20	同	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	5.1	5.6	5.6	5/16	白色	外：海行地ノ寒ハナ、内：橘子山文	地被有	-
86	7 T 15	5 D 20	同	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	5.1	5.6	5.6	5/16	白色	外：海行地ノ寒ハナ、内：橘子山文	地被有	-
87	7 T 15	5 D 20	同	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	5.1	5.6	5.6	5/16	白色	外：海行地ノ寒ハナ、内：橘子山文	地被有	-
88	7 C 9	5 D 20	同	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	4.9	6.5	6.5	5/16	白色	外：海行地ノ寒ハナ、内：橘子山文	地被有	-
89	7 C 9	5 D 20	同	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	4.9	6.5	6.5	5/16	白色	外：海行地ノ寒ハナ、内：橘子山文	地被有	-
90	8 J 12	5 D 10	同	1.5	0.5	砂岩	無	無	無	16.0	1.7	1.8	1/16	白色	外：海行地ノ寒ハナ、内：橘子山文	地被有	近代

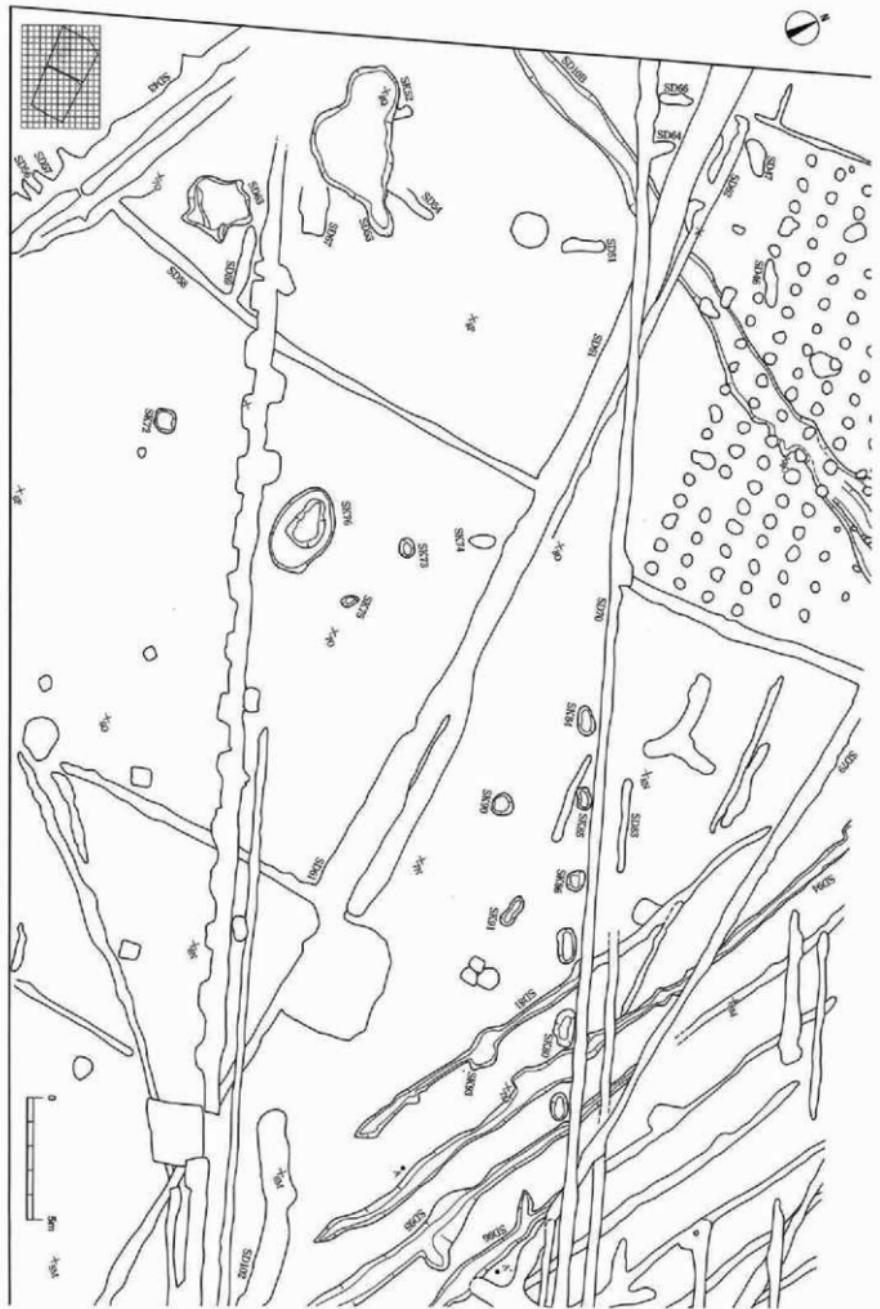


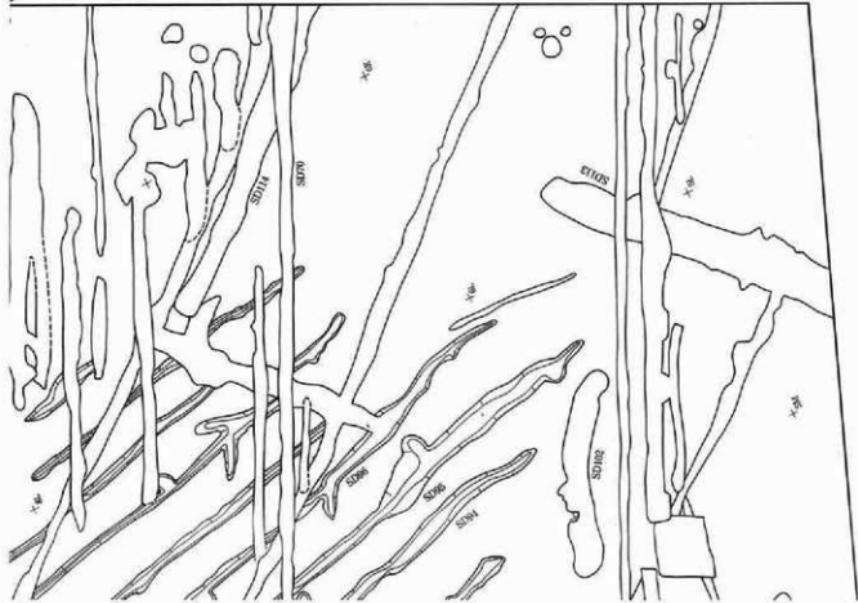
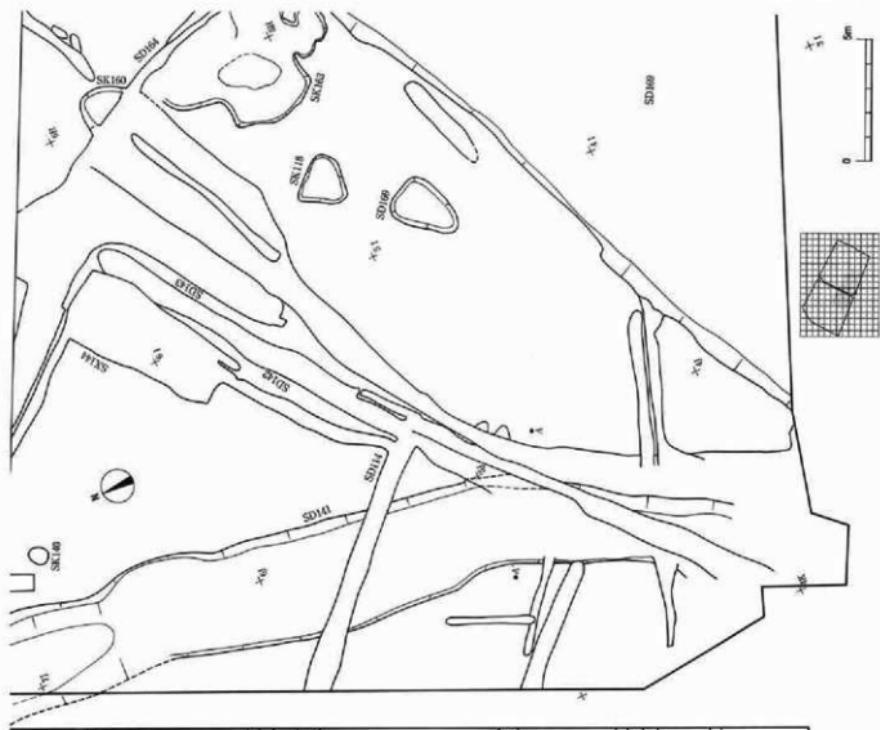


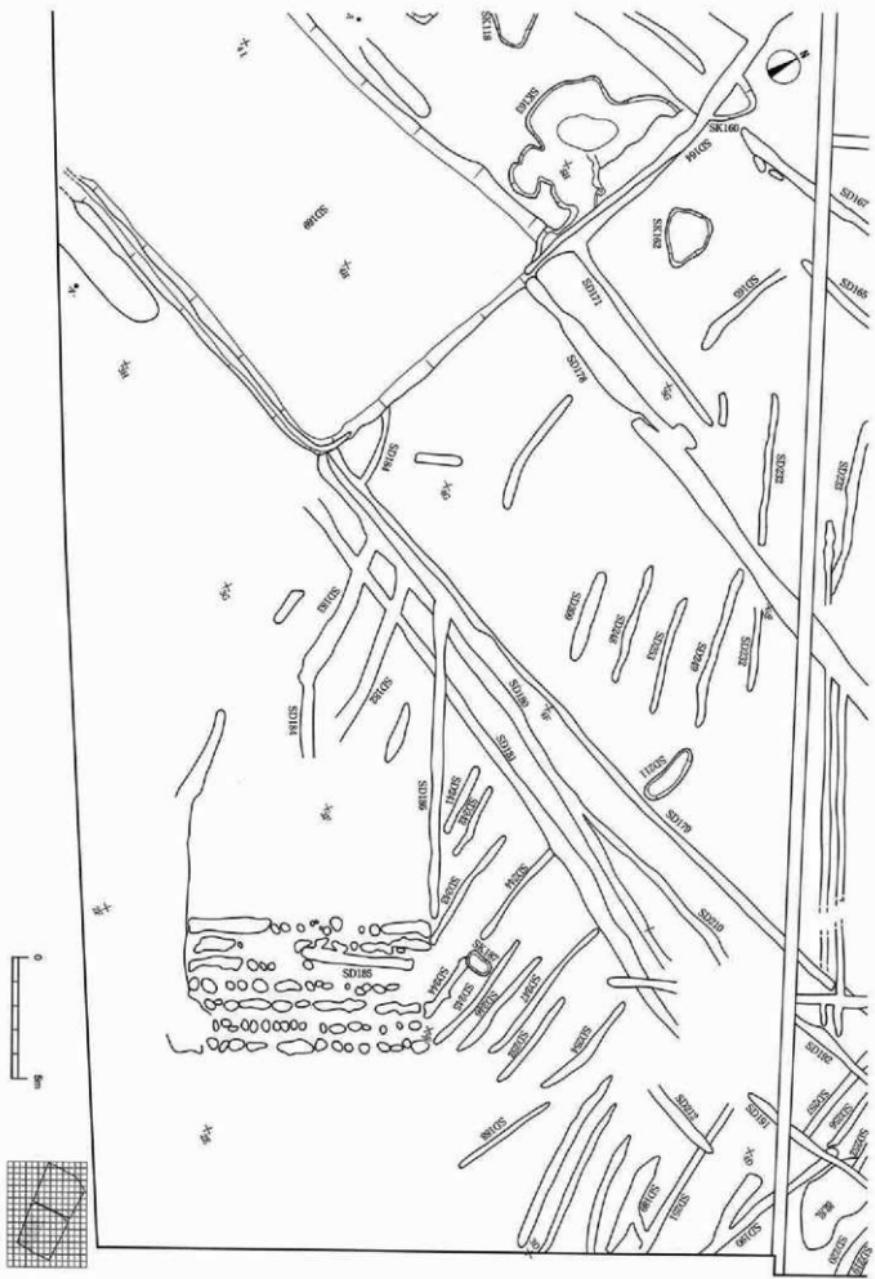
遺構全体図 2 (2)



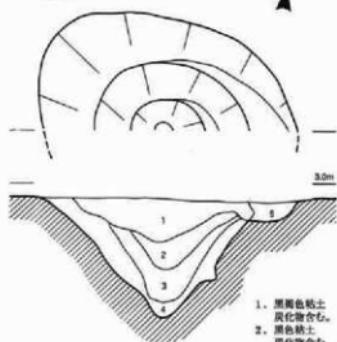




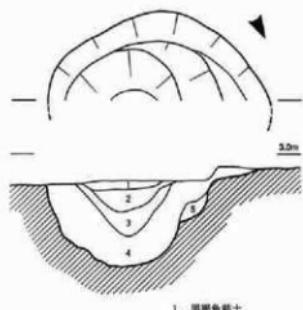




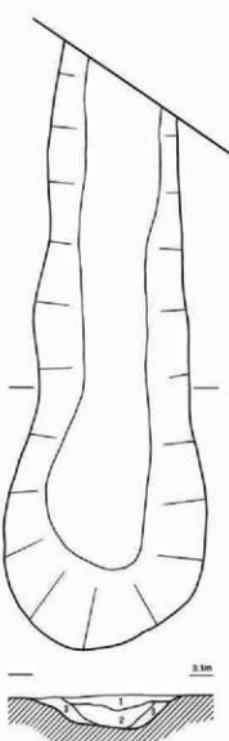
SE119



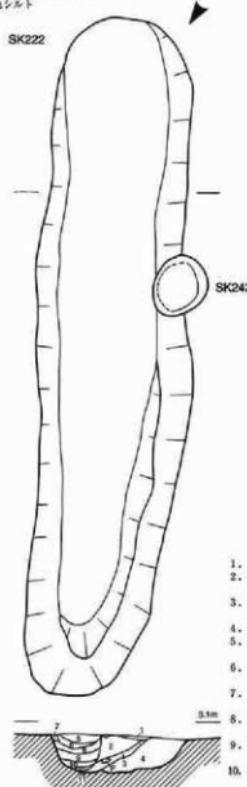
SE122



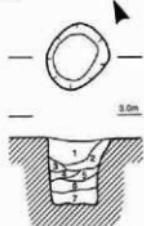
SK121



SK222



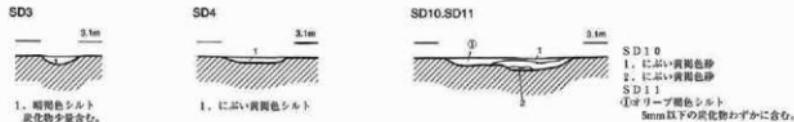
P229

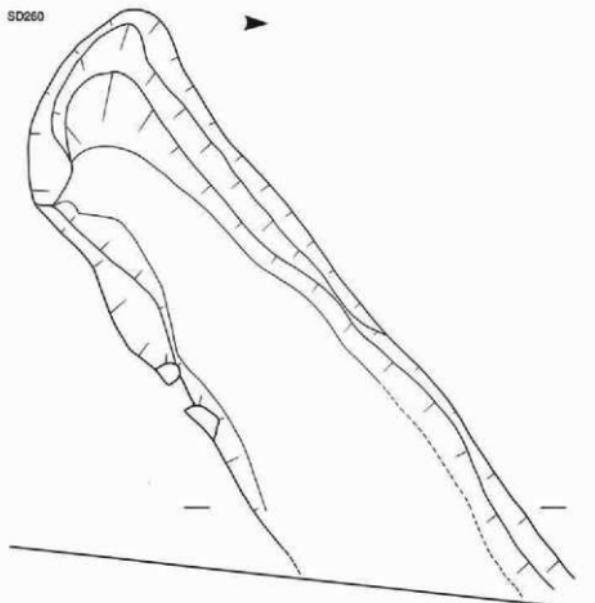


1. 黒色シルト
炭化物含む。
2. 黒色シルト
褐灰色シルト、炭化物含む。
3. に深い褐色シルト
炭化物少量含む。

1. に深い黒褐色土
2. 黒色粘土
3. 黑褐色土
明褐色土粒多く多量に混入。
4. 黄褐色土
5. 黄褐色土
明褐色土粒多く多量に混入。
6. に深い褐色土
明褐色土粒多く多量に含む。黄褐色土ブロック状に少量含む。
7. 黄褐色土
黄褐色土粒多く多量に混入。
8. 黑褐色土
明褐色土粒多く少量含む。
9. 明褐色土
10. 黄褐色土
黄褐色土ブロック状に多量に含む。
11. 黄褐色土
黄褐色土ブロック状に少量含む。

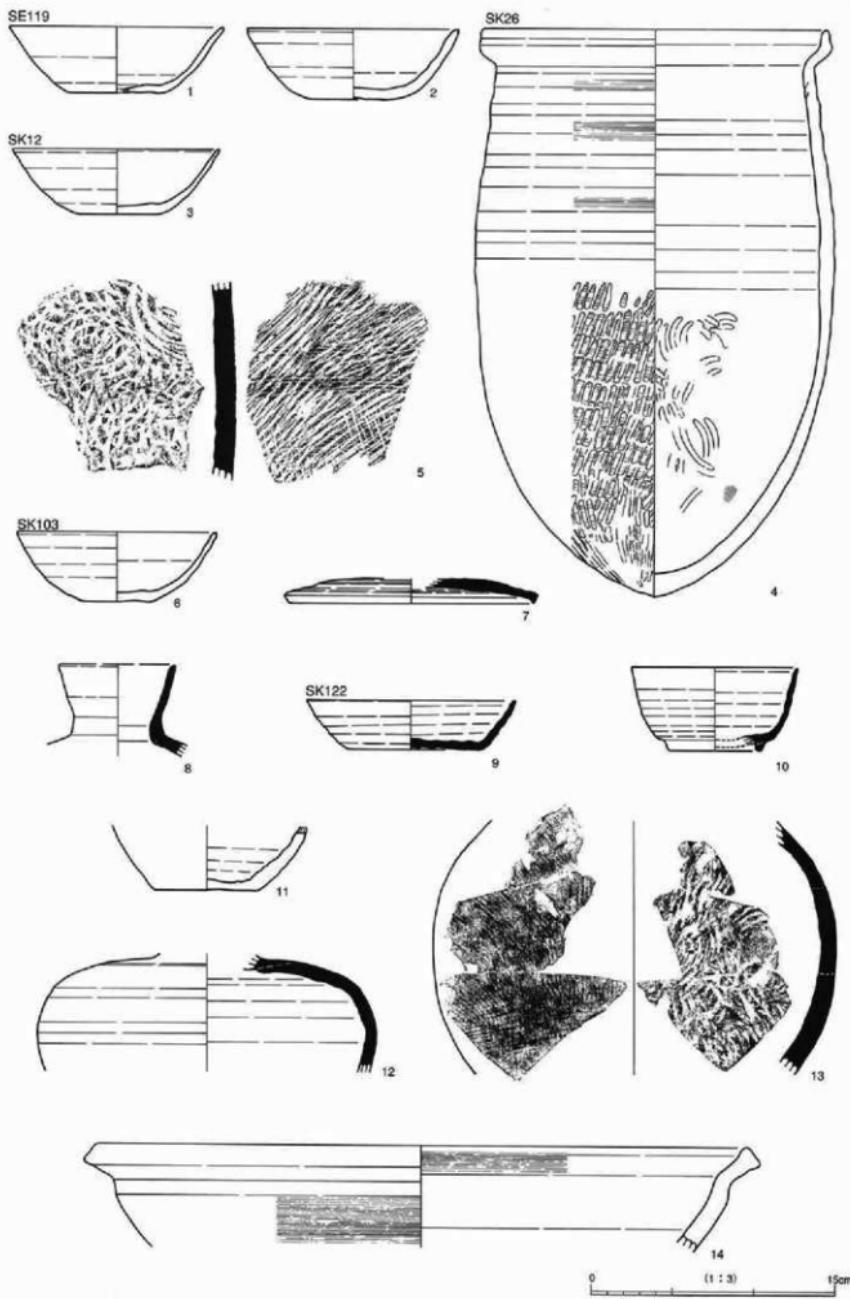
0 2m

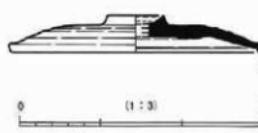
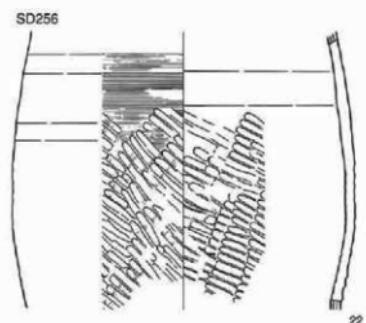
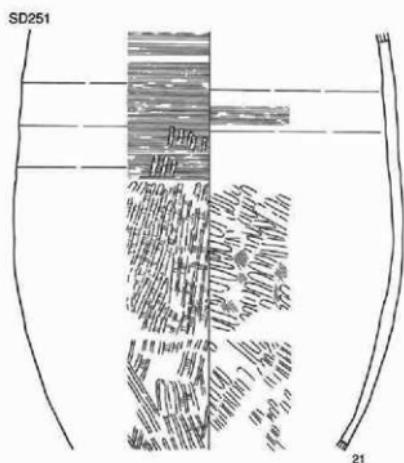
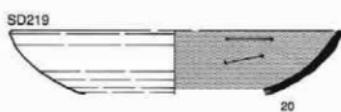
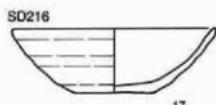
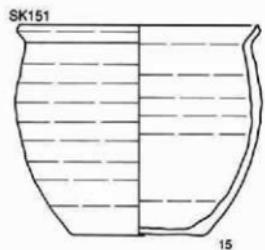




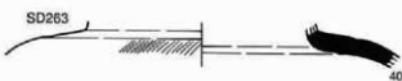
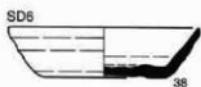
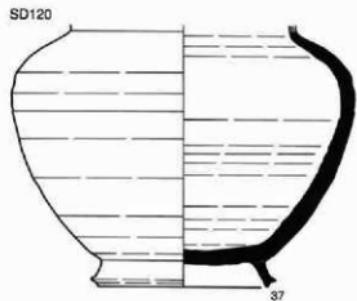
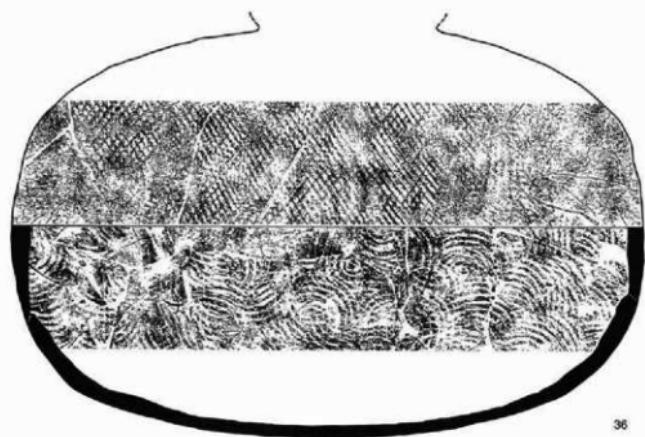
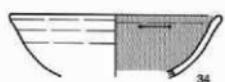
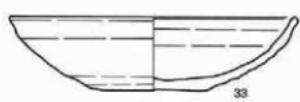
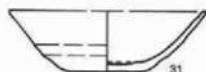
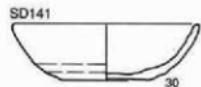
1. 明褐色色砂質土
暗褐色砂質骨土をブロック状に混入。褐色砂質土を多く混入。
2. 灰白色砂質土
褐色砂質土を多量に混入。砂熱層が挟在する。
3. 暗褐色色砂質土
灰白色砂質土
4. 灰白色砂質土
暗褐色砂質土を多量に混入。
5. 灰白色砂質土
暗褐色砂質土を多量に混入。
6. 灰白色砂質土
明褐色土を薄く混入。砂熱層が挟在する。
7. 褐色砂質土
灰褐色砂質土をブロック状にわずかに含む。砂熱層を上面に含む。
8. 灰色砂質土
明褐色砂質土をわずかに混入。
9. 灰色砂質土
暗褐色砂質土をわずかに混入。
10. 灰白色砂質土
11. 灰白色シルト質土
褐色シルト質土を多く含む。
12. 暗褐色砂質土
褐色砂質土を僅に混入。
13. 灰白色砂質土
褐色砂質土を多く混入。
14. 灰白色砂質土
明褐色砂質土をわずかに混入。
15. 灰色砂質土
明褐色砂質土をわずかに混入。
16. 青灰色砂質土
褐色砂質土を混入。
17. 褐褐色色砂質土
暗褐色砂質土をわずかに混入。
18. 青褐色色砂質土
褐色砂質土を混入。
19. 明褐色色砂質土
砂熱層を挟在する。
20. 明青灰色砂質土
暗褐色を多少含む。砂熱層が挟在する。
21. 灰白色砂質土
明褐色灰褐色砂質土をわずかに含む。赤褐色砂を薄く混入。
22. 明青灰色砂質土
明褐色色砂質土をわずかに含む。
23. 明褐色色砂質土
明褐色灰褐色土。
24. 明褐色色砂質土
明褐色灰褐色土と砂熱層の層が挟在する。
25. 灰白色砂質土
褐色砂質土を多く混入。
26. 明褐色色砂質土
褐色砂質土をわずかに含む。
27. 灰色砂質土
灰白色砂質土。
28. 灰白色砂質土
灰白色砂質土。
29. 灰白色砂質土
30. 明青灰砂質土
砂熱層が多く挟在する。
31. 灰白色砂質土
暗褐色色砂質土。
32. 暗褐色色砂質土
砂熱層と砂の互層。
33. 灰白色砂質土
明褐色砂と砂熱層を層状に含む。



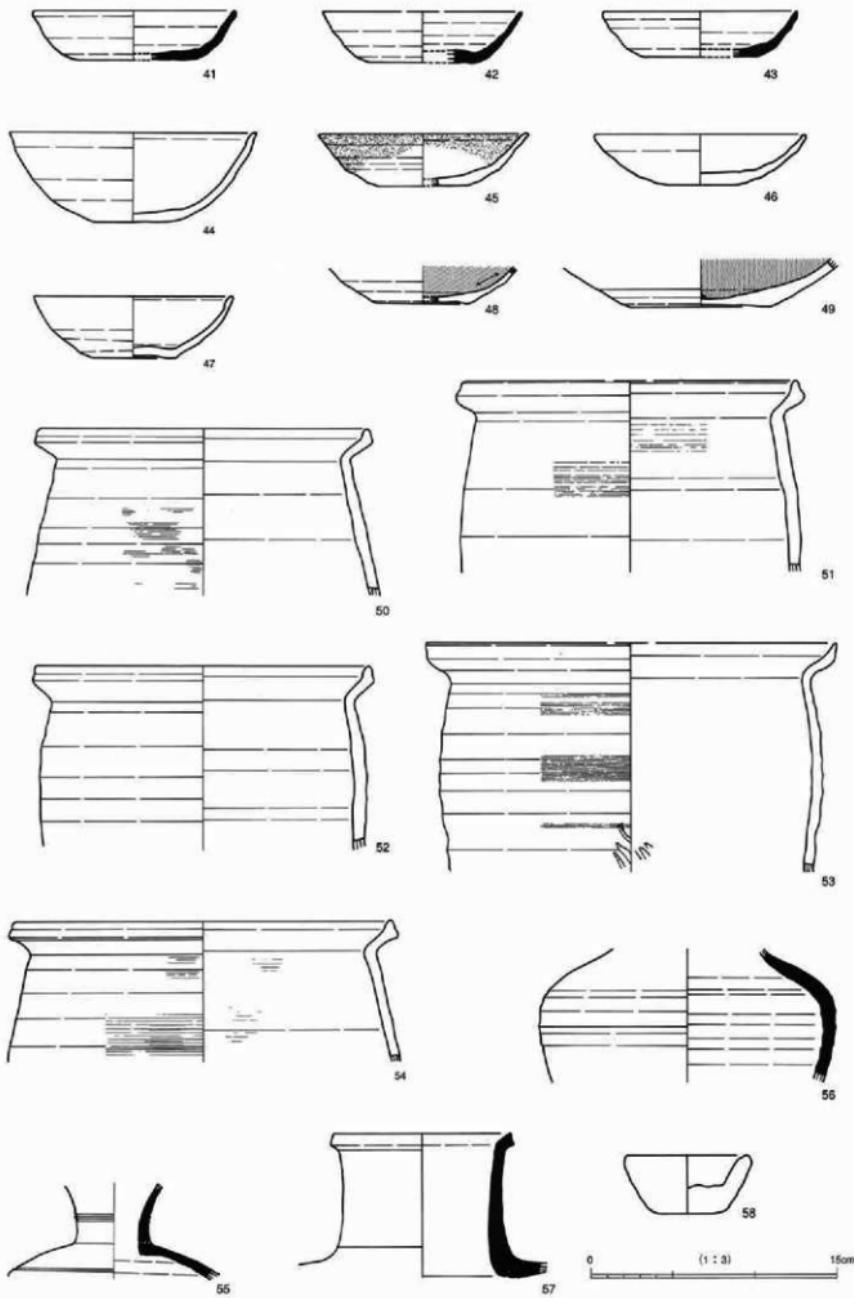




0 (1 : 3) 15cm



0 (1 : 3) 15cm

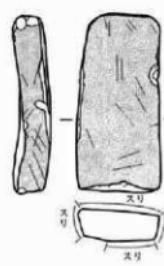




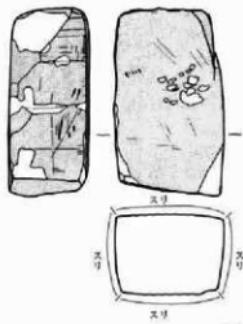
59



60

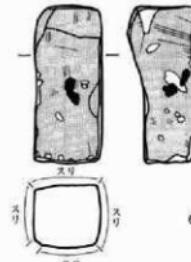


61

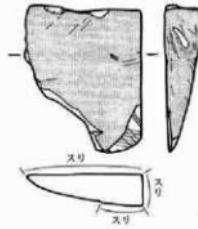


スリ

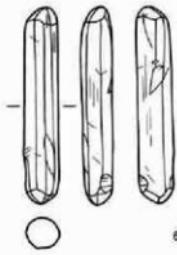
62



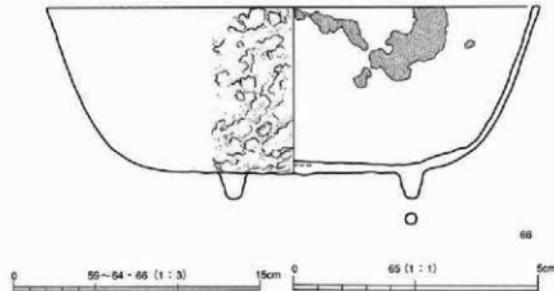
63



64



65



59~64・66 (1:3) 15cm 0 65 (1:1) 5cm



立川周辺の旧地形 (日本地図センター発行 米軍東空軍 1956. 5. 5撮影)



遠 景 (北から)



遠 景 (西から)



全 景



SE 119断面



SE 119完掘



SE 122断面



SE 122完掘



SK 121完掘



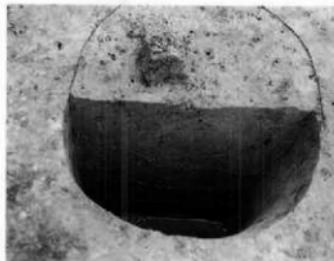
SK 26長甕出土狀況



SK 222断面



SK 222遺物出土狀況



P 229断面



P 229完掘



SD 3断面



SD 4断面



SD 10・11断面



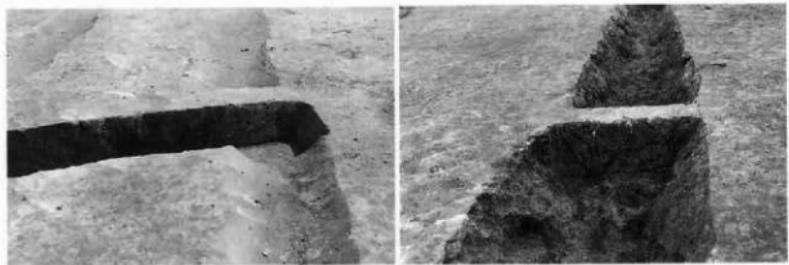
SD 34断面



SD 35断面

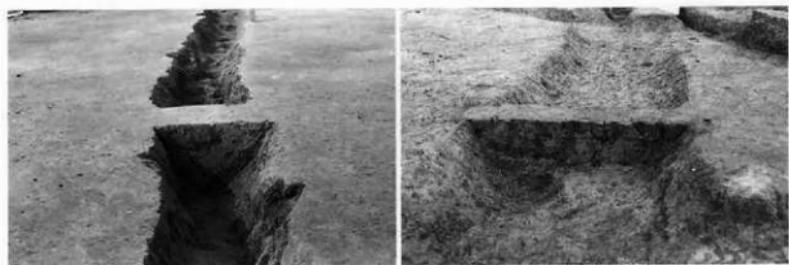


SD 36断面



SD 37断面

SD 94断面



SD 95断面

SD 96断面



11・12 L グリッド完掘 (西から)



8~10 L~O グリッド完掘 (北から)



6~9 LN グリッド完掘 (北から)



SD 220断面



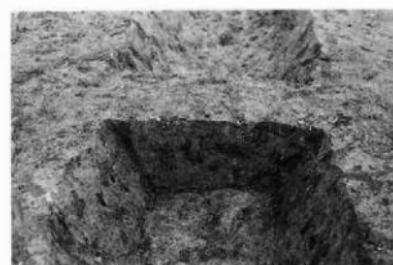
SD 218~221·224完掘



SD 221断面



SD 256断面



SD 234断面



SD 235断面



SD 236断面



SD 237断面



SD 238断面



SD 141断面



SD 120 · 141断面



SD 141遗物出土状况



SD 141完掘



SD 141完掘



SD 141 · 142断面



SD 142 · 143断面



5・6 DE グリッド完掘（北から）



4 EF グリッド完掘（北から）



SD 260断面



SD 260完掘



6~8 C~E グリッド遺物出土状況



SD 169断面



SD 169断面



SD 169断面



SD 169断面



SD 169断面



SD 169完掘



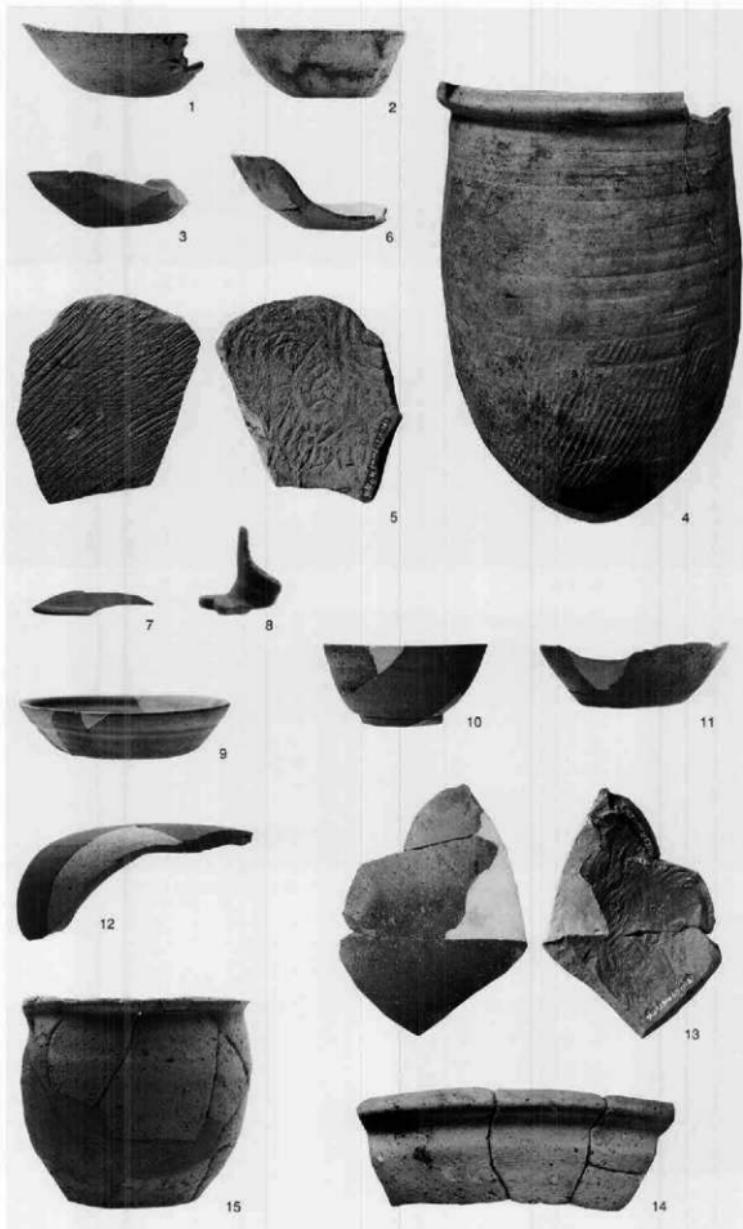
9・10 OP グリッド近世ハサ木

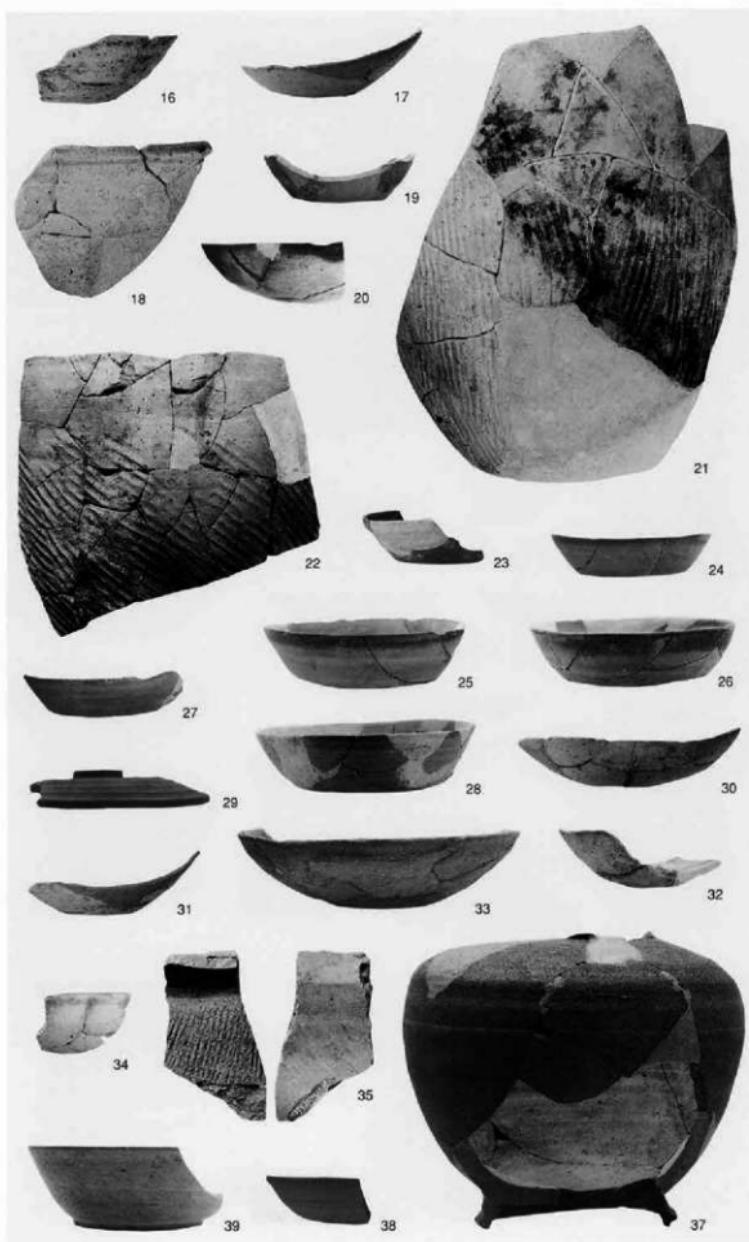


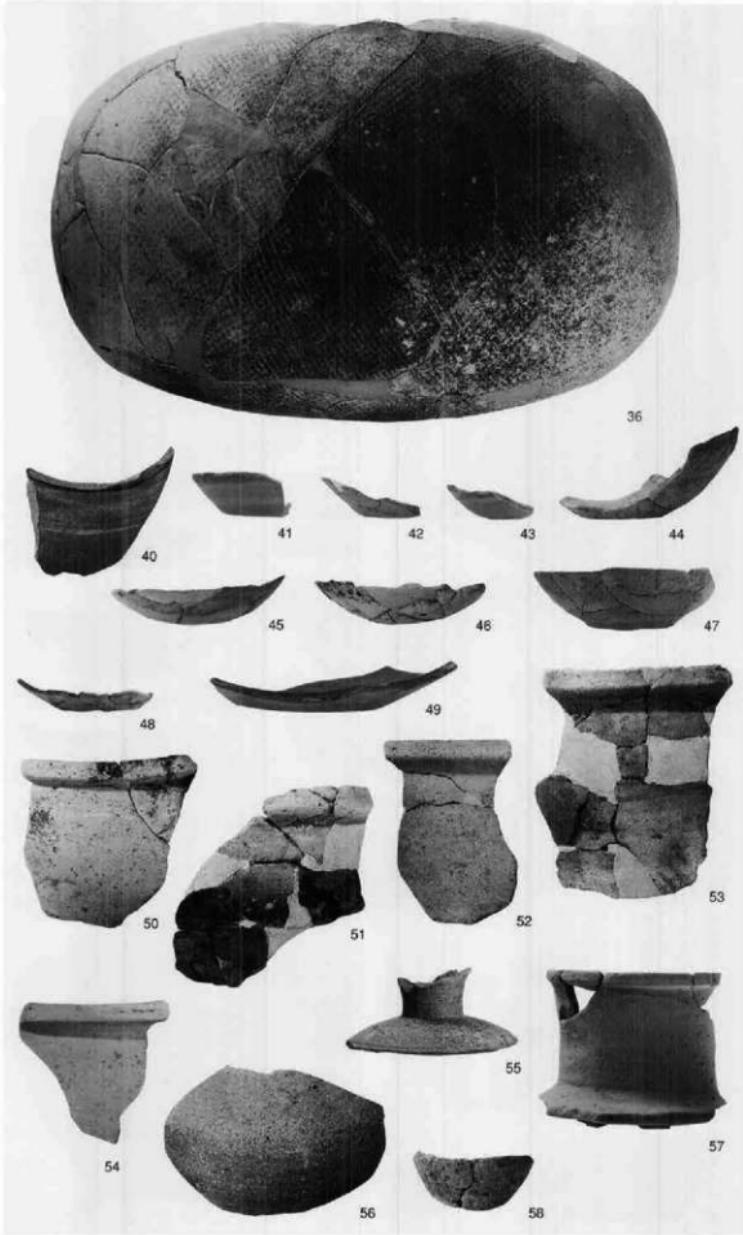
10 N グリッド北壁セクション

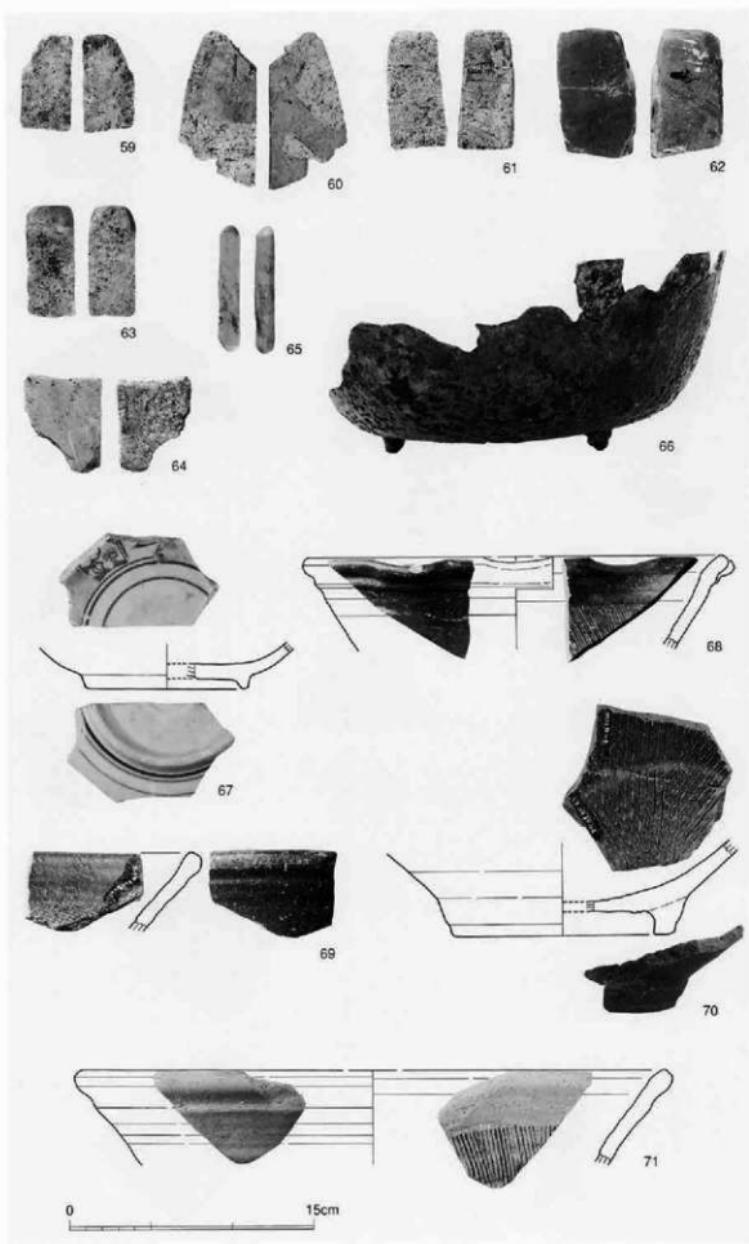


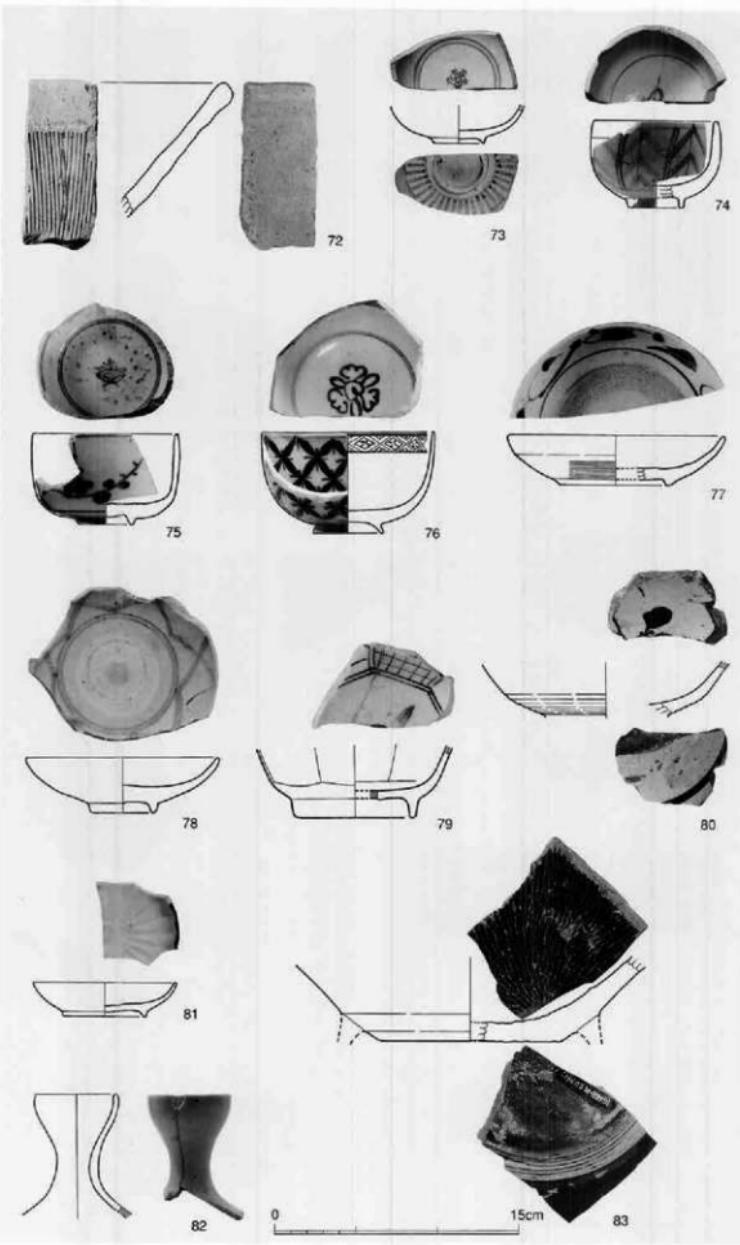
作業風景

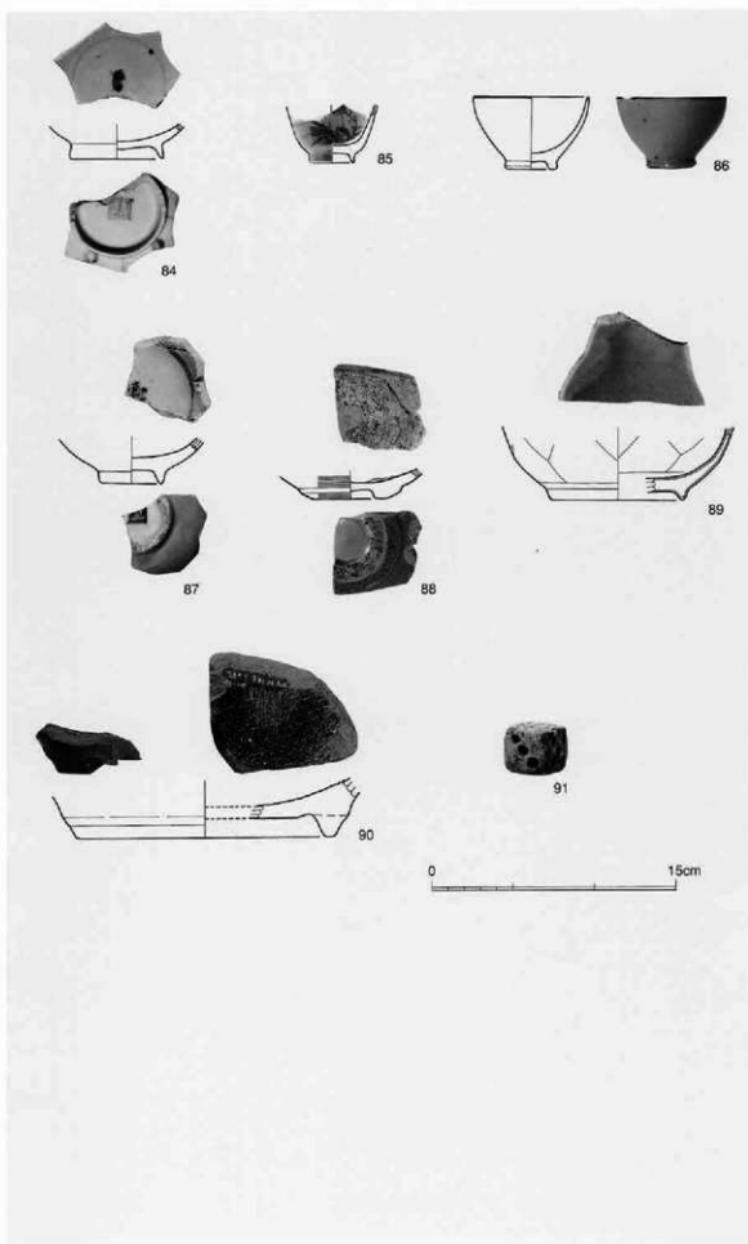












書名	川根谷内墓所遺跡							
副書名	国道49号横雲バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第102集							
編著者名	江口友子							
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	新潟県新津市大字金津93-1							
発行年月日	平成13(2001)年3月30日							
所取遺跡名	所在地	市町村 番号	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
川根谷内墓所遺跡	新潟県中蒲原郡 横越町大字横越 字上郷2379-1 番地ほか	15-323	22	37度 51分 04秒	139度 08分 07秒	一次調査 19930422～ 19930423 二次調査 19940711～ 19941209 19950410～ 19950530	10,000m ²	国道49号横雲 バイパス 建設に伴う 事前調査
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
川根谷内墓所遺跡	遺物包藏地	平安時代 近世	井戸、土坑、 溝状遺構	須恵器、土師器、 石製品、近世陶磁器				

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第102集
国道49号横雲バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ
 川根谷内墓所遺跡

平成13年3月29日 印刷 発行・編集 新潟県教育委員会
 平成13年3月30日 発行
 〒950-8570 新潟市新光町4番地1
 電話 025(285)5511
 新潟県埋蔵文化財調査事業団
 〒956-0845 新潟県新津市大字金津93番地1
 電話 0250(25)3981
 FAX 0250(25)3986
 印刷会社 幸平電子印刷所
 〒970-8024 福島県いわき市平北白土字西ノ内13
 電話 0246(23)9051